ウルトラマンネクサス　ストーリー・ザ・ネクスト

river

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ウルトラマンネクサス　ストーリー・ザ・ネクスト

【Ｎコード】
Ｎ４６４２Ｘ

【作者名】
ｒｉｖｅｒ

【あらすじ】
ウルトラマンノアとダークザギの戦いから一年半。スペースビーストは依然として出現し続け、スペースビーストと共にその存在が公にされたナイトレイダーが対処に当たっていた。そんな中、突如現れる「ビーストの支配者」。そしてそれに対抗するように、「光の巨人」が再び現れた。（この作品は、かつて我がブログにて連載していた作品の再連載版です。）

注意事項

この作品は、かつて我がブログ「疾風の剣士の活動記録」で連載していた、「ウルトラマンネクサス　ストーリー・ザ・ネクスト」の再連載版です。
「転載」ではなく、「再連載」です。
なぜかというと、原版にいろいろと修正を加えているためです。

原作である「ウルトラマンネクサス」の続きということにしているので、設定は原作に準拠しています。
設定に間違いが見受けられた場合は指摘してくださると助かります。
ただし、原作にはないであろう俺の勝手な解釈もありますので、そういうのが苦手な方はお引き取りください。
それと、この作品はネクサスを見返すことなく、うろ覚えで書いていたものなので、登場人物のキャラをつかみ切れていないかもしれません。

最後に、この作品への誹謗中傷、頭ごなしな否定は一切受け付けません、ご了承ください。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１　再臨ー セカンドカミングー

ここは異次元空間、「ビーストフィールド」。
ここに、多くのスペースビーストが集まっていた。
そして、そのビーストたちを束ねる存在がいた。
名は、ビーストバルタン。

バルタン
「フッ・・・勢力は整った。
今こそ、全ての人類を食い尽くすとき！！
手始めに・・・行け！ペドレオン！」
ペドレオン
「ピシャァァァァァァァッ！！」

一方ここは、ＴＬＴ－Ｊ関東第３支部基地フォートレスフリーダム。
その下層部に置かれたコマンドルームに、ＴＬＴ－Ｊ特殊戦略任務班、通称ナイトレイダーのメンバーである、和倉英輔隊長、西条凪副隊長、平木詩織隊員、孤門一輝隊員の四人がそろっていた。
そして今日は、このナイトレイダーに新入隊員が来ることになっていた。

和倉
「よし、みんなそろったな。
早速だが、新入隊員を紹介する。」
孤門
「新入隊員か…」
平木

「どんな人だろう?」
西条
「……」
和倉
「入りたまえ。」

タッタッタッ・・・タッ（立ち止まった音）

西条
「なっ…!?」
平木
「あーーー!!」

新入隊員とは、あの姫矢准だった。

孤門
「姫矢さん!?
　なぜナイトレイダーに!?」
姫矢
「…賭けだ。」
孤門
「賭け?」
姫矢
「ＴＬＴを信用してみることにした。
　この決断が吉と出るか、凶と出るか…
　とにかく、よろしく頼む。」
孤門
「姫矢さん…はい!よろしくお願いします!」

その時、ビースト出現の警報が鳴り響いた。

姫矢
「早速か…」

和倉、西条、平木、孤門、姫矢の５人は、素早く装備を整え、シューターブースに立つ。

和倉
「出動！！」

和倉の号令でシューターは一斉に打ち上げられ、クロムチェスターαには西条が、βには和倉が、γには平木が、δには孤門と姫矢が搭乗し、出撃した。

～ビースト出現現場～
クロムチェスターα、β、γ、δは、現場であるビール工場に到着し、着陸した。
そして二手に分かれ、（和倉＆ａｍｐ;西条、孤門＆ａｍｐ;平木＆ａｍｐ;姫矢）にわかれ、ペドレオンを退治することになった。

和倉
「そこか！！」

和倉はペドレオン（クライン）を発見し、ディバイトランチャーでペドレオンを撃つ。

ペドレオン

「ピギャァァァッ！！」

ディバイトランチャーの銃撃を食らったペドレオンは、爆発四散した。

西条
「…見つけた。」

ズダダダダダ　ドパァァァァン

平木
「見っけ！」

ズダダダダダ　ドパァァァァン

孤門
「いた…！」

ズダダダダダ　ドパァァァァン

姫矢
「喰らえ！」

ズダダダダダ　ドパァァァァン

そうしてペドレオンを各個撃破していったところで、和倉は孤門に通信を取った。

和倉
「孤門、そっちはどうだ？」

孤門
「三体倒しました。」
和倉
「こっちは二体。
イラストレーターによると、残るは五体か。」
平木
「楽勝だね！」
姫矢
「ああ。
だが、油断は出来ない。」

そこで、ＴＬＴの作戦参謀である、「イラストレーター」こと、吉良沢優から通信が入る。

吉良沢
「皆さん、残ったペドレオンが、一箇所に集まり始めました。
すぐにその場所に向かい、殲滅してください。」
和倉
「了解、行くぞ！」

そして全員、ペドレオンが集まっている場所へと向かった。

姫矢
「・・・・・・・・・・・・・・・」
孤門
「姫矢さん？どうしたんですか？」
姫矢
「嫌な予感がする…」
孤門
「嫌な…予感？」

姫矢
「ペドレオンが集まるということは…
まさか！？」

姫矢の予感は的中した。
集まった五体のペドレオンは、融合し、グロースとなった。

平木
「嘘でしょーーー！？」
西条
「くっ…！」」
姫矢
「やはり…融合したか！」
和倉
「応戦だ！」

5人はディバイトランチャーで一斉射撃するが、ペドレオンはものともせず迫る。

ペドレオン
「ピシャアアアアッ！」
孤門
「効いていない…！？」
姫矢
「どうすれば…」
和倉
「チェスターで応戦だ！」
全員
「「「「了解！」」」」

そして、すぐさまクロムチェスターに乗り込み、応戦を開始した。
αはマイクロミサイル「スパイダー」、βは機体下部のレーザーバルカン、γとδはマイクロミサイル「アビロック」でペドレオンを攻撃する。
チェスターでの攻撃となれば、ペドレオンにも着実にダメージを与えていた。

ペドレオン
「ピシャアアアアアアアアッ！！」

しかし、ペドレオンが苦し紛れに放った火球がチェスターδに命中し、不時着してしまった。
やむなく孤門と姫矢はちチェスターから降りると、ペドレオンは孤門を狙ってきた。

孤門
「まずい…！」
姫矢
「孤門！」

姫矢はディバイトランチャーで、孤門を狙う触手を撃ったが、今度は姫矢が触手に捕まってしまった。

姫矢
「くっ・・・！」
孤門
「姫矢さん！」

そしてペドレオンが姫矢を食べようとしたそのとき、突如光の玉が

降ってきて、姫矢を包んで触手から開放し、ペドレオンから離れる。

孤門
「あれは…！？」

光の中で、姫矢の前に、銀色の巨人が姿を現した。

姫矢
「お前は…！」

巨人は、ただじっと姫矢を見つめる。

姫矢
「…たのむ、もう一度、俺に力を貸してくれ！」

姫矢が巨人に手を伸ばすと、光はより強く、目映く輝いた。
そして、光の玉は大きくなり、着陸すると、そこからウルトラマンネクサス・アンファンスが現れた。

孤門
「ウルトラマン…！」

ネクサスは、ペドレオンに向かっていき、ぶつかって押し合いをはじめた。
そして少しずつ、ペドレオンをビール工場から離していった。
そして、十分引き離したところで、キックで少し後退させた。

ペドレオン
「ピシャァァァァァッ！」
ネクサス

（よし、今だ！）

ネクサスは赤い形態、ジュネッスに変身した。

孤門
「ジュネッスになった！
　ということは・・・」

和倉
「メタフィールドか！」

和倉の予想通り、ネクサスはメタフィールドを形成した。

～メタフィールド内～

ネクサスは、ペドレオンが放つ火球をかわしつつ、接近を試みていた。
そして隙を突き、一気に接近、打撃で応戦した。
しかし、キックで後退させたペドレオンにパンチを叩き込もうとした瞬間、ペドレオンが可燃性ガスを吐いてきた。
たまらずネクサスは後退してしまい、その隙を突かれ、ネクサスはペドレオンの電撃鞭を食らってしまう。
しかしネクサスも喰らい続けるばかりでなく、隙をついてジュネッススキックでペドレオンを大きく蹴り飛ばした。
そしてペドレオンが墜落し、立ち上がるのを見計らって、ネクサスハリケーンでペドレオンの動きを封じた。

ネクサス
（オーバーレイ・シュトローム！）

ペドレオン「ピギャァァァァァァァァッ！！」

そこに必殺光線、オーバーレイ・シュトロームを放ち、ペドレオンは跡形もなく爆発した。
そしてネクサスは、メタフィールドを解除し、姫矢に戻った。
そこへ、孤門が駆け寄る。

孤門
「孤門さん、また、ウルトラマンに…」
姫矢
「…ああ。
だが、ビーストと戦うとなれば、ウルトラマンの力は必要になる。」
孤門
「…とりあえず、帰還しましょうか。」
姫矢
「そうだな。」

～ビーストフィールド～
バルタン
「ウルトラマン…再び現れたか…
くく…じっくりと見せてもらうぞ、ウルトラマン…
お前の力が、どれほどのものなのかを…
さて…次は、一味違うペドレオンを見せてやろう…
フッフォッフォッフォッフォッフォッフォッ…」

Ｅｐｉｓｏｄｅ１　再臨ー セカンドカミングー（後書き）

次回予告

バルタン
「我が名は、ビーストバルタン。」
平木
「飛んだー!?」
和倉
「一箇所に集まって、どうするつもりだ…!?」
孤門
「融合した…!?」
姫矢
「何なんだ…あの巨大なペドレオンは…!?」

「Ｅｐｉｓｏｄｅ２　融合ーフュージョンー」

バルタン
「対抗できるか?ウルトラマン…」

Ｅｐｉｓｏｄｅ２　融合－フュージョン－

和倉
「最近、グロースペドレオンが連続で、しかも同時刻に出現している。
　実際、先ほど現れたので、十日目にして十体目だ。
　しかも全て、二箇所の同じガソリンスタンドに交替で、しかも転送されるように現れている。」
平木
「どういうことなんだろ？」
西条
「…裏に、何者かがいる…？」
姫矢
「その可能性も、捨てきれないか…」
和倉
「明日、俺と西条はガソリンスタンドＡへ、平木と孤門と姫矢はガソリンスタンドＢへ向かい、防衛体制を敷く。
　今日はＢに現れたため、明日はＡに現れる可能性が高い。」
孤門
「じゃあ、なぜＢにも？」
姫矢
「フェイントでふただびＢに現れる可能性がある、ということだろう。」
西条
「ＡとＢの両方に同時出現、という可能性もあるわ。」
孤門
「なるほど…」
和倉
「作戦決行は、ペドレオンの出現時間の三十分前だ。

いいな。」
全員
「「「「了解。」」」」

～翌日～

和倉と西条はガソリンスタンドAに、平木と孤門と姫矢はガソリンスタンドBに到着していた。
到着から三十分後、やはりグロースペドレオンが現れた。
しかも、西条の予想通り、二箇所同時に現れた。

姫矢
「やはり同時に来たか…」
孤門
「下手に攻撃すれば、周りを巻き込んでしまう…」

ペドレオンA
「ピシャァァァァァァァッ！！」
ペドレオンB
「ピシャァァァァァァァッ！！」

孤門
「どうすれば…」
姫矢
「誘き出すことは…出来ないか…」
平木
「あっ、何あれ！？」

平木が指差したほうを見ると、空に黒雲が現れ、雲の中心に大きな穴が開いた。
その穴から、声が聞こえてきた。

？

「対抗策がないのか？ナイトレイダーよ。」
まあ、そいつらは貴様らに倒させるために出したわけではないからな。」

姫矢
「何者だ！！」

姫矢が叫ぶと、雲の穴に、ビーストバルタンの姿が映った。

バルタン
「我が名は、ビーストバルタン。
スペースビーストを統べるもの。」

孤門
「スペースビーストを…統べるもの…？」

その時、孤門のパルスブレイガーに通信が入った。

和倉
「孤門！聞こえるか！？」

孤門
「あ、はい！どうしたんですか！？」

和倉
「そっちにも見えるか！？
ビーストバルタンと名乗るやつが！」

孤門

「はい、見えます！」
姫矢
「このペドレオンは、何のために出したんだ！？」
バルタン
「貴様らに、新たなるペドレオンを見せてやろうと思ってな。」
姫矢
「新たなるペドレオン、だと？」
バルタン
「すぐに見せてやる。
まず、準備といくか。」

ビーストバルタンがそう言うと、和倉に吉良沢から連絡が入った。

吉良沢
「和倉隊長、新たに三体のペドレオンを確認しました。」
和倉
「何だと…！？」
バルタン
「まだまだ、これからだ！…と言いたいところだが、まず一旦、全員チェスターに戻ってもらおう。」
和倉
「…いいだろう。
チェスターに乗り込むぞ。」

そして、全員クロムチェスターに乗り込んだ。

バルタン
「では、改めて…
本番はこれからだ！！」

ビーストバルタンがそう叫ぶと、二体のグロースペドレオンは、フリーゲンに変身し、飛び立った。

平木
「飛んだー!?」
和倉
「追うぞ!!」
全員
「「「「了解!!」」」」

クロムチェスターも飛び立ち、フリーゲンの後を追った。
フリーゲンは、以前襲撃されたビール工場に飛来した。
他に三体飛んできて、合計五体のフリーゲンが飛来し、着陸して、グロースに戻った。
そして、一箇所に集まり始めた。

和倉
「一箇所に集まって、どうするつもりだ…!?」
西条
「様子がおかしい…」

西条が言い終わった、まさにその瞬間、グロースが溶け始め、合わさっていった。
そう、融合しているのだ。

孤門
「グロースが・・・融合した!?」

そして出来上がったペドレオンは、元の二倍、いや三倍になっていた。

姫矢
「何なんだ!?
あの巨大なペドレオンは!?」
バルタン
「くくく…驚いたか…
これこそが、新たなるペドレオン、その名も、「クライシス」だ!!」
姫矢
「くっ…孤門、チェスターを頼む。」
孤門
「わかりました。」

そして姫矢は、エボルトラスターを取り出し、鞘から抜いて、ウルトラマンネクサス・アンファンスに変身した。

バルタン
「くくく…現れたか、ウルトラマン…
だが、貴様の三倍の巨体を持つクライシスに、対抗できるか?ウルトラマン…」
ペドレオン
「グシャァァァァァァッ!!」
ネクサス
(迷っている暇はないな…
応戦するしかない!)

ネクサスは、ひとまず周囲の安全を確保するため、メタフィールドを展開した。
ナイトレイダーも、クロムチェスターをハイパーストライクチェスターに合体させ、メタフィールドに突入した。

～メタフィールド内～
ネクサスは応戦を開始した。
しかし、クライシスペドレオンは体のあらゆるところから触手が生えており、しかもその全てに電撃を流せるため、うかつに近づけば袋叩きになってしまう。
ネクサスはパーティクル・フェザーで触手を破壊していき、何とか攻撃を当てようとする。
しかし、触手はすぐに再生し、きりがない。

和倉
「ウルトラマンを援護だ！」
全員
「「「了解！」」」」

ナイトレイダーもアビロックで攻撃するが、やはりきりがない。

西条
「再生が早すぎる…！」
孤門
「姫矢さん、頭を狙ってみてください！」
ネクサス
（頭…よし！）

ネクサスはペドレオンの頭部めがけ、クロスレイ・シュトロームを発射した。
頭部は見事に吹き飛んだものの、すぐに再生してしまった。

孤門

「駄目か…！」

ペドレオンは火球を放って、ネクサスを攻撃する。
ネクサスはそれをかわしながら、パーティクルフェザーで攻撃し続ける。

和倉
「…よし、ウルトラマンの光線に、ハイパーストライクバニッシャーを合わせるんだ。
それを、奴が消滅するまで当て続ける！」

西条
「…それしかないわね。」

孤門
「姫矢さん！」

ネクサス
（わかった。
オーバーレイ・シュトローム！）

ネクサスが必殺光線を放つ。

孤門
「ハイパーストライクバニッシャー、シュート！」

そしてそれに、ハイパーストライクチェスターから放たれたハイパーストライクバニッシャーが合わされて、ペドレオンに命中する。

ペドレオン
「グシャァァァァァァッ！！」

ペドレオンは効いている素振りを見せないが、ネクサスとハイパー

ストライクチェスターは光線を撃ち続ける。
すると、ペドレオンが青く光り始めた。

和倉
「あと一歩だ！」
ネクサス
（おおおおおおおおおおおおおおっ！！）

ネクサスは、一気に光線の威力を強めた。

ペドレオン
「グシャァァァァァァァァァァァァァァ！？」

その一撃が命中すると、ペドレオンは青い粒子となって四散した。

孤門
「やった！！」
和倉
「うまくいったか…」

ネクサスのコアゲージは既に点滅しており、ネクサスは膝をつく。
そして少し息を整えると、立ち上がってメタフィールドを解き、空へ飛び立った。
その後、孤門の後ろに姫矢が戻ったのを確認すると、ハイパーストライクチェスターは分離して帰還した。

～ビーストフィールド～
バルタン
「ほう…なかなかやるな…ウルトラマンに人間ども…

だが、まだ始まったばかりなんだ、存分に楽しもうじゃないか…
フッフォッフォッフォッフォッフォッフォッ…」

Ｅｐｉｓｏｄｅ２　融合ー フュージョン ー（後書き）

次回予告

ガルベロス

「ガルルルルルル…」

孤門

「あれ…は…」

西条

「まさか…復活していたのか…」

バルタン

「果たして、どこまで粘れるかな…」

ネクサス

（やはり…やられたか…）

「Ｅｐｉｓｏｄｅ３　魔人ー ファウスト ー」

ファウスト

（さあ…始めようか…ウルトラマン！！）

Ｅｐｉｓｏｄｅ３　魔人ーファウストー

～ビーストフィールド～

バルタン

「さて…次はどんな手で行こうか…

ん？お前…やりたいのか…？」

？

（俺に…行かせろ…）

バルタン

「ほう…面白い…

念のためだ…ガルベロスを護衛に付けておこう…」

？

（ふん…まあいい…）

バルタン

「くくく…さあ、存分に楽しむがいい…

ダークファウストよ…」

ファウスト

（お前に言われるまでもねぇよ…！）

～フォートレスフリーダム～

姫矢

「最近、ビーストの襲撃がないな…」

孤門

「少し、ひるんだのか…？」

和倉

「そうだとしても、油断は禁物だ。」

その時、ビースト出現の警報が鳴った。

西条
「来たわね…」

そして、ナイトレイダーは装備を整え、クロムチェスターに搭乗し、出撃した。

～ビースト出現地～
ガルベロス
「ガルルルルルル…」
孤門
「あいつか…！」
和倉
「攻撃開始！」
全員
「「「了解！」」」」

クロムチェスターは、全機攻撃を開始する。

西条
「バニッシャーレーザーキャノン！」
和倉
「メガレーザー！」
平木
「メタルレーザー！」
孤門
「クアドラブラスター！」

西条・和倉・平木・孤門
「「「「シュート！」」」」

四機から一斉にレーザーが放たれ、ガルベロスに命中する。

ガルベロス
「グオオオオオ！！」

孤門
「よし、効いてる！」

和倉
「このまま一気に行くぞ！」

だが、ガルベロスもやられてばかりではいなかった。
三つの頭から、火炎弾を発射し、反撃して来た。
しかも、攻撃の隙を与えないよう、連続で発射してきた。

孤門
「くっ、これじゃうまく攻撃できない！」

姫矢
「俺が行く！」

そういうと姫矢は、エボルトラスターを構え、ウルトラマンネクサスに変身した。

ガルベロス
「ガオオオオオオオ！」

ネクサス
（行くぞ！）

ネクサスはガルベロスに突進し、押し合いになった。

ガルベロスは三秒ほどで振り払い、火炎弾を発射してきた。
火炎弾がネクサスに命中してネクサスは吹っ飛び、ガルベロスは追い討ちをかけようと、火炎弾の発射準備に入った。

孤門
「させるか！」

クロムチェスターδがアビロックでガルベロスを攻撃し、火炎弾の発射を阻止した。
その隙にネクサスはクロスレイ・シュトロームを撃って、ガルベロスをひるませた。

ガルベロス
「グオオオオオオ！」

ネクサスはその隙にジュネッスに変身、メタフィールドを展開した。
クロムチェスターもハイパーストライクチェスターに合体し、メタフィールドに突入した。

～メタフィールド内～
ネクサスはガルベロスと組み合い、脇腹に蹴りを入れ、腹部を蹴り飛ばしてガルベロスを遠ざける。
そして一瞬身構えると、ジャンプしてガルベロスの中央の頭にチョップを叩き込んだ。

ガルベロス
「グオオオオオオオオオオ！」

ガルベロスは火炎弾で攻撃するが、ネクサスは側転でそれを回避し、
ボードレイ・フェザーでガルベロスを吹っ飛ばした。

ガルベロス
「グオオオオオ…」

ガルベロスは、徐々に弱っていった。

和倉
「あと一息だ！」

ネクサスはオーバーレイ・シュトロームを放とうとした。
その時だった。
ネクサスの背後から黒い光線が発射され、ネクサスはひるんだ。

和倉
「何だ、今の光線は！？」
ネクサス
（この光線…まさか！？）

ネクサスは光線が飛んできた方向を向いた。
その先に立っていたのは…

ネクサス
（ダーク…ファウスト！？）
ファウスト
（よう…ウルトラマン…）

そう、第一の闇の巨人、ダークファウストだった。

孤門
「あれ…は…」
西条
「まさか…あいつまで復活していたのか…」

バルタン
「再開を果たした気分はどうだ?孤門一輝…
もっとも、あいつは前の奴とは完全に別物だがな…」

ビーストバルタンが、ダークファウストの背後に幻影で現れた。

和倉
「ビーストバルタン…!」

バルタン
「さて…ウルトラマン。
お前には、ファウストとガルベロスを、同時に相手してもらう。
果たして、どこまで粘れるかな…
フッフォッフォッフォッフォッフォッ…」

そういうと、、ビーストバルタンは姿を消した。

ファウスト
(行くぜ…ウルトラマン!!)

そしてダークファウストは、メタフィールドをダークフィールドに塗り替えた。

ネクサス
(やはり…やられたか…)

ファウスト
（さあ…始めようか…ウルトラマン！！）

ダークファウストはネクサスに攻撃を開始した。
両者とも、一進一退の攻防戦になった。
ダークファウストがネクサスを投げ飛ばし、追撃をかけようと走り出すと、ネクサスは
パーティクル・フェザーでダークファウストをひるませた。
その隙にクロスレイ・シュトロームを発射し、ダークファウストを吹っ飛ばした。

ファウスト
（ぐうっ！？）
ネクサス
（少しは効いたようだな…）
ファウスト
（ほざけ！！）

ダークファウストは、ダークレイ・ジャビロームを発射したが、ネクサスはマッハムーブでかわした。

ファウスト
（ちぃっ…ちょこまかと！）
ネクサス
（力任せの奴にやられるほど…俺は甘くない！）
ファウスト
（ふん…ほんとかよ？）

ダークファウストが行った瞬間、ネクサスに火炎弾が命中した。
そう、ガルベロスだ。

ネクサスがダークファウストと戦っている間に、体力を回復していたのだった。

ネクサス
（くっ…そうだ…あいつもいたんだったな…）
ファウスト
（おらぁ！どんどん行くぞ！！）

ダークファウストが追撃を開始する。
ダークファウストが掴みかかり、横に投げ飛ばす。
そこにガルベロスが火炎弾を発射し、追撃する。

和倉
「ウルトラマンを援護だ！
ガルベロスを攻撃する！」
全員
「「「「了解！」」」」

ストライクチェスターがガルベロスを攻撃するが、ダークフィールドの力でビーストの力が増幅されているため、効いていない。

和倉
「効いていない…！？」
孤門
「どうすれば…」

そうしている間に、ガルベロスは火炎弾でネクサスを攻撃する。

ネクサス
（くっ…このままでは…）

ファウスト（どうした…もう終わりか？ウルトラマン！）

ダークファウストはダークレイ・ジャビロームを放ち、ネクサスを吹っ飛ばした。

ネクサス
（ぐあああああああああっ！）

ネクサスは地面に倒れ伏し、コアゲージが点滅を始めた。
そんなネクサスの背中をダークファウストが踏みつける。

ネクサス
（ぐうっ…）
ファウスト
（ハッ、この程度かよ。）

ダークファウストはネクサスを思い切り蹴り飛ばした。

ネクサス
（がはっ…！？）
ファウスト
（フン、この辺にしておいてやるよ。
おととい来やがれ、雑魚が！）

そう言い放ち、ダークファウストとガルベロスは姿を消し、ダークフィールドも消滅した。
ネクサスは変身が解け、姫矢は倒れ伏したまま拳を握りしめる。

姫矢
「くそっ…！」

～ビーストフィールド内～
ファウスト
（フン、ウルトラマンもあの程度か。
楽勝だな。）
バルタン
「随分と余裕だな…」
ファウスト
（当然だ、あの程度。）
バルタン
「ならばそのまま倒せばいいものを…何故生かした？」
ファウスト
（あそこで倒してもつまらんからな…復活したところをもう一度潰すのさ！）
バルタン
「やはりそうか…これだから馬鹿は困る…」
ファウスト
（何だと…！？）
バルタン
「まあいい、ならば次も確実に倒すことだ。」
ファウスト
（言われなくても、潰してやるさ…！）

Ｅｐｉｓｏｄｅ３　魔人ーファウストー（後書き）

次回予告

ファウスト
（貴様を全力で潰す！！それだけだ！！）
ネクサス
（くっ…またペドレオンか…）
西条
「私が行くわ。」
姫矢
「…頼む。」

「Ｅｐｉｓｏｄｅ４　剣ーブレイブー」

ネクサス
（覚悟するのは…貴方のほうよ！）

Ｅｐｉｓｏｄｅ４　剣ーブレイブー（前書き）

注意！！
今回は、原作ではあり得ないであろう、俺のオリジナルの解釈というか設定が含まれています。
「は？できるわけないだろこんなの。」と一瞬でも思ったなら、そこでお帰りください。
気分を害されても一切責任は持ちません。
また、注意はしたので、文句も受け付けません。
以上のこと、ご了承ください。

Ｅｐｉｓｏｄｅ４　剣ーブレイブー

ファウスト
（出てこいウルトラマンーーーー！！）

突然ダークファウストが出現し、暴れ始めた。
ナイトレイダーはすぐに出動し、姫矢もネクサスに変身した。

ネクサス
（ダークファウスト！！）
ファウスト
（来たか！！ウルトラマン！！）
ネクサス
（何のつもりだ！？）
ファウスト
（貴様を全力で潰す！！
それだけだ！！）
ネクサス
（今回は一人だけか…いけそうだな。）
ファウスト
（なめるなぁ！！）

ダークファウストはペドレオンを呼び出した。

ネクサス
（何をするつもりだ！？）
ファウスト
（こうするんだよ！！）

ペドレオンが溶け、ダークファウストを包んでいく。
そしてダークファウストは、ペドレオンと融合した。

ペディスト
（どうだ！！これが俺の新たな姿！！
　ダークペディストだ！！）
ネクサス
（…きもさとグロさが増しただけだな。）
ペディスト
（ほう…これを食らってもそんなことがいえるか！？）

そういうとダークペディストは、手首から生えた三つの突起を触手にして襲い掛かってきた。
ネクサスはそれを何とかかわしていく。

ネクサス（くっ…
　流石に厄介だな…）
ペディスト
（くたばれ！！ネクサス！！）
ネクサス
（断る！！）

ネクサスはパーティクル・フェザーで触手を切断した。
だが案の定、いくら触手を破壊してもすぐに再生してしまう。

ネクサス
（やはり再生能力も健在か…！）

ネクサスはジュネッスに変身しようとする。

ペディスト
（おっと、変身はさせねぇぞ！）

ダークペディストが触手を鞭のようにして攻撃を仕掛け、ネクサスに変身する隙を与えない。

ネクサス
（くっ…！）
ペディスト
（どうした！？
どうしたどうしたどうしたああ！！）

ダークペディストが猛攻撃を開始した。
ネクサスは触手の乱舞をかわし切れず、喰らってしまう。

ネクサス
（ぐあああっ！！）
ペディスト
（おらおらおらおらあああああ！）

だが、後ろががら空きだったため、クロムチェスターの集中攻撃を食らってしまった。

ペディスト
（ぐおおおおおっ！？）
ネクサス
（隙あり！）

ネクサスは、クロスレイ・シュトロームでダークペディストを吹っ飛ばした。

ペディスト
（くっ…ちくしょおおおお！！）

バルタン
「そこまでだ。」

突如、ビーストバルタンが現れ、介入した。

ペディスト
（じゃまd…ぐはっ！！）

バルタン
「終わりだっていってるだろう。
ナイトレイダー、今一度チャンスをやろう。
策でも練って出直すがいい。」

そういうと、ビーストバルタンは、ダークペディストをつれて消えた。
その瞬間、ネクサスは倒れ、姫矢に戻った。

孤門
「姫矢さん！」

孤門は姫矢をクロムチェスターδに乗せると、フォートレスフリーダムへ帰還した。

～ビーストフィールド内～
ペディスト

（くそっ！くそくそくそくそっ！
何で止めたんだよ！バルタン！！）
バルタン
「攻撃に夢中になって、やられていたではないか、愚か者め。」
ペディスト
（やられてたのはネクサスだろ！！）
バルタン
「お前もやられたことに変わりはない。
だが、あれならウルトラマンもすぐには出られないはずだ。」
ペディスト
「そうか…なら、先にナイトレイダーから潰してやる！！」

～フォートレスフリーダム　メディカルルーム～
姫矢は治療を受け、安静にしていた。
そこへ、西条が訪れた。

西条
「…どう？」
姫矢
「…すぐには出られそうにない。」
西条
「そう…」

西条は椅子に腰かける。

姫矢
「…奴を倒すには、ウルトラマンの力が必要だ。
だが、奴は俺の回復を待ってはくれないだろう。」
西条

「ええ…間違いなく、先に私たちを潰しにかかるわね。」
姫矢
「俺が…不覚を取らなければ…」
西条
「…姫矢。」
西条が、覚悟を決めたように姫矢を呼ぶ。
西条
「私が行くわ。」
姫矢
「何…？」
西条
「あなたが再びウルトラマンになれたのなら、私にもなれるはずよ。
…それに、私にはもう、憎しみはないわ。
同じ過ちは、繰り返さない。」
姫矢
「……」
姫矢は、そっとエボルトラスターを差し出した。
姫矢
「…頼む。」
西条は頷くと、エボルトラスターを受け取った。
すると、エボルトラスターは一瞬光を放った。
姫矢と同化していたネクサスが、エボルトラスターを通して、西条と同化したのだ。
そのとき、ビースト出現の警報が鳴った。

西条
「…行ってくるわ。」
姫矢
「油断するなよ。」
西条
「ええ。」

西条は立ち上がり、コマンドルームへ向かった。

～ビースト出現現場～
ペディスト（出てこいナイトレイダーーーー！！）

クロムチェスターが現場に到着すると、すでにダークペディストが暴れていた。

西条
「隊長、ハイパーストライクフォーメーションを。」
和倉
「何か策があるのか。」
西条
「はい、必ず奴を倒します。」
和倉
「…わかった。
ハイパーストライクフォーメーション、行くぞ！」

クロムチェスターは、ハイパーストライクチェスターに合体した。
西条は合体完了を確認すると、エボルトラスターを取り出す。
そして、エボルトラスターの鞘を抜き、ウルトラマンネクサス・アンファンスに変身した。

和倉
「何…！？」
平木
「嘘…！？」
孤門
「副隊長が…ウルトラマンに…！」

ペディスト
（馬鹿な！？なぜウルトラマンが！？）
ネクサス
（残念だけど、貴方の当ては外させてもらったわ。）
ペディスト
（まさか…別の適能者（デュナミスト）か！？）
ネクサス
（そういう事！）

ダークペディストが驚愕している隙に、クロスレイ・シュトロームを発射した。

ペディスト
（ぐあああああっ！
おのれえええええ！）
ネクサス
（隙あり…！）

ネクサスは一瞬の隙を突き、ジュネッスに変身した。
そのジュネッスは、見たことのない姿だった。

孤門
「あれが…副隊長のジュネッス…」

これこそ、西条のジュネッス、「ジュネッスブレイブ」であった。

ペディスト
（しゃらくせぇ！）

ダークペディストは触手を伸ばし、攻撃を開始する。
ネクサスは、左腕の「セイバーアームドネクサス」についているグリップを握り、引き抜いて、
光の剣「シュトロームセイバー」をだした。
そして、ダークペディストの触手を次々と斬っていき、どんどん接近していく。

ペディスト
（何だと…！？
来るなあああああっ！！）
ネクサス
（断る！）

そしてネクサスは、ダークペディストシュトロームセイバーで斬り飛ばした。

ペディスト

（ぐわあああああ！？）
ネクサス
（また…隙あり。）

ネクサスそういうと、メタフィールドを展開した。

ペディスト
（くっ…こんなものすぐ…）
ネクサス
（…させるわけないでしょ。）

ネクサスは、すばやくダークペディストを斬り付ける。

ペディスト
（ぐうううっ！！）
ネクサス
（食らいなさい…！）

ネクサスは、剣にシュトロームエネルギーをこめ、一気に振り下ろした。
すると、シュトロームエネルギーが三日月形の光の刃となって飛んでいき、ダークペディストを斬り裂いた。

ペディスト
（があああっ！？）
ネクサス
（…今のが、セイバーレイ・シュトローム。
そしてこれが…）

ネクサスは、シュトロームセイバーを頭の上に一直線に構えると、

円を描くように、シュトロームエネルギーを放出しながらシュトロームセイバーを腕ごと回し、放出したシュトロームエネルギーをシュトロームセイバーに集めると、ダークペディストに一気に接近し、ダークペディストをすれ違いざまに渾身の力で斬り裂いた。

ネクサス
（オーバーセイバーレイ・シュトローム！！）

ペディスト
（ぐわあああああ！？）

ダークペディストは爆発した。

ネクサス
（…終わりね。）

ファウスト
（じゃかしゃあい！！）

しかし、爆発したのはペドレオンのみで、ダークファウストは生きていた。

ネクサス
（…まだ生きてたの…しつこい奴ね。）

ファウスト
（…今回は退いてやる！
だが次は潰す！！）

ダークファウストはそういうと、姿を消した。

ネクサスもメタフィールドを解き、帰還した。

～ビーストフィールド内～
バルタン
「…ダークファウストは重傷。
あんなことをほざいていたが、しばらく出れそうにない。」
？
「ということは、私の出番でしょうか…」
バルタン
「そういうことだ。
期待しているぞ…ダークメフィスト。」
メフィスト
（ふっ…おまかせください。）

Ｅｐｉｓｏｄｅ４　剣ー ブレイブー（後書き）

次回予告
メフィスト
（ネクサス…覚悟！！）
ネクサス
（そうは行かない！！）
孤門
「ファウストに続いて、あいつまで…」
和倉
「西条！！」

「Ｅｐｉｓｏｄｅ５　悪魔ー メフィストー」

メフィスト
（消えていただきましょう！！）

ＥｐｉｓｏｄｅＥＸ　地底怪獣ーグドンー（前書き）

番外編を挟みます。
少しギャグ要素ありです。

ＥｐｉｓｏｄｅＥＸ　地底怪獣ーグドンー

突如、ビースト出現の警報が鳴り響き、ナイトレイダーはすぐさま出撃した。

和倉
「ペドレオン発見！攻撃を開始する！」

西条
「一体だけ…楽勝ね。」

孤門
「それにしても、一体何体目なんだか…」

姫矢
「全くだな…
さっさとやるか。」

ペドレオン
「ピシャアアアッ！！」

クロムチェスターα、β、γ、δは、各機攻撃を開始した。

ペドレオン「ピシャアアアアッ！！」

孤門
「よし、効いている！」

和倉
「一気に行くぞ！」

そのとき、ペドレオンの後ろから土煙が噴出し始めた。

姫矢
「待て！！奴の後ろから何か来るぞ！」

そして、ペドレオンの後ろの地面から、黄土色の怪獣が出てきた。

グドン
「ふわあ…あーよく寝た。」
西条
「あいつは…新たなビースト？」
孤門
「でも、それにしてはのんきすぎるんじゃ…
　というか人語喋ってるし…」
平木
「あー！あの怪獣はー！」
和倉
「知っているのか？平木。」
平木
「グドンさんですよ！
　地上最強の怪獣と呼ばれている、あの地底怪獣グドンさんですよ！」
西条
「地底怪獣なのに地上最強って…」
姫矢
「人語喋ってる時点ですごいな。」

ペドレオン
「ピシャアアアアアッ！」

なぜかペドレオンは、グドンさんに八つ当たりをした。

グドン
「うるさいんだよ！目覚めの気持ちよさが台無しだろ！
というかすでにお前のその姿で台無しだよ！！」

そういうとグドンさんは、ペドレオンを鞭でぶっ飛ばした。

孤門
「うわー、さらっとひどいこといった…」

ペドレオン
「ピッシャアアアアア！！」

ペドレオンはついにぶち切れ、仲間を四体呼び、クライシスペドレオンになった。
…この際、なぜペドレオンに感情があるかは気にしないでおこう。

平木
「でっかくなっちゃったー！！」

孤門
「これじゃ、流石のグドンさんでも…！」

グドン
「でかいぶん、動き遅いなー。」

そう言うとグドンさんは、かなり速いスピードで、クライシスペドレオンの背後に回った。

グドン
「くらえ！ハイパー・グドンサーベル薪割り切り！」

グドンさんは、右腕の鞭を一直線に伸ばすと、「ハイパー・グドンサーベル」というビームサーベルに変化させた。
そしてハイパー・グドンサーベルを一直線に振り下ろし、クライシスペドレオンを真っ二つに切り倒した。
もちろん、クライシスペドレオンは爆発した。

孤門
「く、クライシスを一撃で…！？」

西条
「なんて強さなの…」

グドン
「あーつかれた。
二度寝しよー。」

グドンさんは、地中へ潜っていった。

～翌日～
またビースト出現の警報が鳴った。
ナイトレイダーが現場に向かうと、そこには、ダークファウストが指揮するペドレオン三体に囲まれたグドンさんが居た。

ファウスト
（やっちまえ！）

ペドレオン
「ピシャアアアッ！」

そしてペドレオンは、グドンさんを電撃鞭でめった打ちにした。

グドン

「うーむ…最近ツインテールを全然見かけないな…
流石に焼き鳥じゃあ飽きてきたしなー…」

どうやらグドンは、主食であるツインテールが見つからないときは、何故か焼き鳥で飢えをしのいでいるらしい。

ファウスト
（ふざけんな！
さっさとくたばれ！！）
グドン
「うっさいんだよ！人か真剣に悩んでるのに！！
邪魔だ！ハイパー・グドンサーベル回転切り！！」

グドンさんは、ハイパー・グドンサーベルで周囲のペドレオンを一掃した。

ファウスト
（なっ…なんなんだこいつは！？）
グドン
「ぐへへへへへ！さあ次は貴様の番だ！
さあてどうしてやろうか…」

グドンさんは、悩んでいるところを邪魔されて、かなりキレていた。

ファウスト
（ひいい、なんていうか！！
ダークレイ・ジャビローム！！」
グドン
「ぎゃあああああ！少年エース買い忘れた！！」
ファウスト

（ふざけんのもいい加減に…）

西条
「…ちょっと行って潰してくる。」

そういうと西条は、エボルトラスターの鞘を抜き、ウルトラマンネクサスに変身した。
そして、ダークファウストの顔にとび蹴りを食らわせた。

ファウスト
（ひでぶっ！？
　ウルトラマン、貴様あああああ！！）
ネクサス
（あんたを見てたら腹立ってきた。）
グドン
「あんた誰？」
ネクサス
（私はウルトラマン。
　こいつを潰すなら力貸すけど。）
グドン
「ちょうどよかった。
　　ツインテール見なかった？」
ネクサス
（…攻撃されたのスルーなのね…）

呆れながらもネクサスは、ジュネッスブレイブに変身し、メタフィールドを展開した。

グドン
「なんじゃこりゃー！

包まれていくー！！」
ネクサス
（…お願いだから静かにして。）

～メタフィールド内～
ファウスト
（おらあああああ！
ふざけはゆるさねえええええ！）
グドン
「さりげなくパクってんじゃねー！！」

グドンさんの鞭が、突っ込んできたダークファウストの顔に命中した。

ファウスト
（ぶ！？）

グドン
「残酷鞭ラッシュ！！」

ファウスト
（ばべらっ！？ぶべらっ！？ぼべらっ！？ばべらっ！？）

ネクサス
（確かにある意味残酷…）
ファウスト
（くううう…おのれえええ…）
ネクサス
（あなたもさっさと楽になりなさい。）

そう言って、ネクサスはダークファウストの顔に上段回し蹴り（いわゆるカブトのライダーキック）をかました。

ファウスト
（がはあああああっ！？）
ネクサス
（悪いけど、終わらせてもらうわ。
いきますか？グドンさん。）
グドン
「逝ってよし！」

そういうと、グドンさんはハイパー・グドンサーベルを、ネクサスはシュトロームセイバーを構えた。

グドン
「ハイパー・グドンサーベル音速斬り！」
ネクサス
（オーバーセイバーレイ・シュトローム！）

グドンの音速に達した斬撃が命中し、1秒おいてネクサスの斬撃が命中した。

ファウスト
（ギャアアア！？
時間差攻撃かよー！！）

そう叫ぶと、ダークファウストはぶっ倒れた。
そのあと、ビーストバルタンに運ばれた。
それを見届けると、ネクサスはメタフィールドを解いた。

グドン
「今日は助かったよー。
ありがとねー」
ネクサス
（別に、礼を言われるほどじゃあ…）
グドン
「あ！ツインテール発見！！」
ツインテール
「ゲ！？
ヒイイイイイイイイ！！」
グドン
「待てえええええ一ヶ月ぶりのツインテールーーーーー！！」

その数分後、ツインテールの悲鳴が轟いたという…

ＥｐｉｓｏｄｅＥＸ　地底怪獣ーグドンー（後書き）

予告は前回やったので無し。
代わりにグドンさんについて説明します。

グドンさんとは、ストーリー・ザ・ネクストの原版を一番応援してくれた方のキャラです。
その方は、毎回必ずストーリー・ザ・ネクストに感想をくれました。
あの方の応援が、ストーリー・ザ・ネクストの連載の支えでした。

そして、日頃の応援に感謝し、ブログ開設一周月記念として、このコラボ番外編を書きました。

…途中からグドンさんの原作者の話になったな。

グドンさんは、普段はバカだけど、「地上最強」と呼ばれている通り、その実力はかーなーりの物です。超強いです。
実はグドンさん、このあと本編にも堂々登場しますので、その活躍をお楽しみに！

Ｅｐｉｓｏｄｅ５　悪魔－メフィスト－

～ビーストフィールド内～

バルタン

「前の戦いでダークファウストは重傷。
しばらく闘えないな、あれは。」

？

（突貫野郎の無様な末路、というわけですね。）

バルタン

「…相変わらず毒舌だな、お前は。」

？

（いえいえ、それほどでも。）

バルタン

「…褒めた覚えはない。
それよりも…」

？

（ついに私の出番、というわけですね。）

バルタン

「そういうことだ。
お前の新たな力、ネクサスに見せ付けてこい…ダークメフィスト。」

メフィスト

（承知しました。）

孤門

その日、姫矢は、孤門と共に、公園へ散歩に出ていた。

「たまには、こういうのもいいですね。」
姫矢
「ああ、そうだな。」
孤門
「天気も良いし、息抜きにはちょうどいいですね。」
姫矢
「まったくだ。」

？

「すみません、ちょっといいですか？」

その声に孤門が振り返ると、そこには…

孤門
「…姫矢さん？」
姫矢
「いや、俺はここにいるが…」

そこには、姫矢と瓜二つの青年がいた。

？

「私は、闇矢瞬と申します。
姫矢准さん、孤門一輝さん、ですね。」
姫矢
「ああ、そうだが。」
孤門
「それで、何の用ですか？」
闇矢
「お話があります。
ご同行お願いします。」

孤門
「…わかりました。
　姫矢さん。」
姫矢
「ああ、わかった。」

そして、姫矢と孤門は、闇矢とともに、人気のない場所に来た。

孤門
「それで、話って、何ですか？」
闇矢
「貴方方に、ちょっと用がありましてね…
　…デュナミストのお二方。」
姫矢
「…おまえ、なぜそれを…？」
闇矢
「それはもちろん、私が貴方方の敵だからですよ。」
孤門
「何者なんだ！？」
闇矢
「…第二の闇、とでも申しましょうか。
　まずは、手始めに…」

そういって、闇矢が右腕を振り上げると、後方にガルベロスが出現した。

カルベロス
「グオオオオオオッ！！」
孤門
「あれは…ガルベロス！！」

姫矢
「そうか…確か、まだ倒してなかったな。」
闇矢
「さあ、早くしないと、みんな食べられてしまいますよ?」
孤門
「でも、エボルトラスターはまだ副隊長に…」

西条「私がどうかした?」

孤門
「副隊長!」
闇矢
「貴方とは初対面ですね。
私は、闇矢瞬と申します。」
西条
「…話はもう聞いてるわ。
ガルベロスなんてこずる必要も無い。」

そういうと、西条はエボルトラスターを取り出し、鞘から引き抜いて、ウルトラマンネクサス・アンファンスに変身した。

闇矢
「現れましたか…ウルトラマン。」

ネクサスは、すぐにジュネッスブレイブに変身し、メタフィールドを展開した。

～メタフィールド内～
ガルベロス
「グオオオオオオオオオオッ!!」

ガルベロスは火球を連続で放つが、ネクサスはそれをシュトローム
セイバーで斬り裂きながら、ガルベロスに接近する。

ネクサス
（はっ！）
ガルベロス
「グオ！？」

ネクサスはガルベロスを連続で斬り付け、ジュネッスキックで蹴り
飛ばした。

ネクサス
（セイバーレイ・シュトローム！）

そして、空中のガルベロスにセイバーレイ・シュトロームを放ち、
ガルベロスは空中で爆発した。
ガルベロスを倒したネクサスは、メタフィールドを解こうとした。
しかし、人が立っているのをみつけた。
そこに立っていたのは、闇矢だった。

闇矢
「やはり、ガルベロスでは、消耗も出来ませんか…
やはり、私がやるしかありませんか…
まあ、元からそのつもりだったのですがね。」

そういうと闇矢は、何かを取り出した。
それは、ダークエボルバーだった。
そして闇矢は、ダークエボルバーを両手で持ち、左右に引き伸ばし
た。

その瞬間、闇矢は闇に包まれ、ダークメフィストに変身した。

ネクサス
（やはりお前だったか、ダークメフィスト。）
メフィスト
（わかっていたのですか？）
ネクサス
（予想はしていた。）
メフィスト
（それでは、さっそくいかせていただきます！）

そういうとダークメフィストは、メタフィールドをダークフィールドに塗り替えた。

ネクサス
（やはり、か…）
メフィスト
（では、始めましょうか…
闘いを！！）
ネクサス
（望むところ！！）

ネクサスとダークメフィストは同時に走り出し、同時にとび蹴りを繰り出した。
それは両者に当たり、二人ともあお向けに落ちた。
二人ともすぐに立ち上がり、少し間を取った。

メフィスト
（ふふ…やりますね、ネクサス…）
ネクサス

（まだ飛び蹴りしかしてないでしょう。）

ネクサスは、シュトロームセイバーを引き抜き、構えた。

メフィスト
（…それが、貴方の新たな力ですか。）

ダークメフィストは、ネクサスをあざ笑うかのようにそういうと、腕のメフィストクローを構えた。

ネクサス
（何がおかしい…？）
メフィスト
（…新たな力を手にしたのは、貴方だけではないのですよ…！）

そういうとダークメフィストは、クローから二本の黒い光の剣を出した。

ネクサス
（なっ…！？）
メフィスト
（メフィストツインソード、とでも名づけましょうか。
覚悟していただきましょう、ウルトラマン！！）

そういうと、ダークメフィストはネクサスに向かって走り出した。
メフィストツインソードとシュトロームセイバーが何度もぶつかり合い、激しく音がなる。

ガキィィィィン

ネクサス
（くっ…）
メフィスト
（ふっ…やりますね。
ですが…まだまだです！）

ダークメフィストはそういうと、ネクサスを押し飛ばし、一気に間合いをつめた。

メフィスト
（覚悟！）
ネクサス
（そうは、いかない！）

ネクサスは、間一髪でメフィストツインソードを止めた。
そして、後ろに受け流した。

メフィスト
（くっ…一筋縄ではいきませんか…
ならば…）

そういうと、メフィストツインソードを真上に突き出し、ネクサスのオーバーセイバーレイ・シュトロームの逆向きに回し、放出したダークシュトロームエネルギーをメフィストツインソードに集中させた。

ネクサス
（くっ、決めるつもりか…！）

ネクサスも、オーバーセイバーレイ・シュトロームを発射しようと

する。
そして、両者の発射準備が完了すると、両者は同時に走り出した。

メフィスト
（オーバーソードレイ・シュトローム！！）
ネクサス
（オーバーセイバーレイ・シュトローム！！）

両者の必殺技が同時に決まった。
そして、両者とも、しばらく沈黙する…
そして…

ネクサス
（ぐっ…）

先にひざを着いたのは、ネクサスだった。

メフィスト
（くっ…流石はネクサス、なかなかの威力でした。
ですが、ここがダークフィールドだったことが誤算でしたね…！）

そういうとダークメフィストは、メフィストツインソードを戻し、
必殺光線の構えを取った。
ネクサスも、すかさずシュトロームセイバーをセイバーアームドネクサスに戻し、オーバーレイ・シュトロームの構えを取る。

メフィスト
（オーバーダークレイ・シュトローム！！）
ネクサス
（オーバーレイ・シュトローム！！）

壮絶な光線の撃ち合いが始まった。
だが始まって数秒後…

メフィスト
（ネクサス、先ほど言ったはずですよね？）
ネクサス
（何…！？）
メフィスト
（このダークフィールドでは、貴方はあまりにも不利すぎる…！！
はあああああああああああああっ！！）

ダークメフィストが光線に力をこめると、ネクサスはどんどん押されていき、遂に食らってしまった。

ネクサス
（ぐあああああああああっ！！）

オーバーダークレイ・シュトロームをまともに食らったネクサスは、そのまま倒れ付してしまった。

メフィスト
（ふっ、流石にここまでのようですね。
では…）

ダークメフィストがメフィストツインソードを構える。

メフィスト
（消えていただきましょう！！）

Ｅｐｉｓｏｄｅ５　悪魔ー メフィストー（後書き）

次回予告

？

「させるかぁ！」
メフィスト
（ぐうっ！？）
平木
「グドンさん！！」
メフィスト
（待っていたのですよ、貴方を。）
グドン
「ま、勝つしかないっしょ。」

「Ｅｐｉｓｏｄｅ６　助太刀ーフェイトグドンー」

フェイトグドン
「装着完了！フェイトグドン！！」

Ｅｐｉｓｏｄｅ６　助太刀ー フェイトグドンー

ダークフィールド内で、ダークメフィストと闘う、ウルトラマンネクサス。
しかし、光線の打ち合いに敗れ、倒れ伏してしまった。
そんなネクサスに止めをさそうと、ダークメフィストが襲い掛かる。

メフィスト
（消えていただきましょう！！）

メフィストツインソードを構えたダークメフィストが、ネクサスめがけ走り出す。
そして、メフィストツインソードをネクサスに突き刺そうと、腕を勢いよく後ろに引いた、そのときだった。

？
「させるかぁ！
ハイパー・グドンウィップ！！」

地中から、光の鞭が飛び出し、ダークメフィストを叩き飛ばした。

メフィスト
（ぐうっ！？）
？
「どーーーーん！！」

そんな叫び声と共に、地中からグドンさんが飛び出した。

グドン

「回りから最強とか言われてて最近なんとなくうっとうしいと感じてるグドンさんです！！」
メフィスト
（自己紹介長すぎですので、貴方も消えてください。）
グドン
「断固拒否！」

そういうとグドンさんは、ハイパー・グドンサーベルを構える。
その瞬間、メフィストツインソードとハイパー・グドンサーベルがぶつかり合った。

ガキィィィィン

グドン
「危なっ！？」
メフィスト
（さすがにやるようですね。
ですが、ここがどこだかわかってますか？）
グドン
「もちろん。
じゃ、そういうことで。」

そういうとグドンさんは、ダークメフィストを押し飛ばし、もう片方の鞭を倒れているネクサスに巻きつけ、ハイパー・グドンサーベルに力をこめた。

グドン
「ハイパー・グドンサーベル空間斬り！！」

そういうとグドンさんは、目の前をハイパー・グドンサーベルで斬

った。
すると、空中に切れ目が入り、開いた。

グドン
「よし。
じゃ。」

そしてグドンさんは、ネクサスを連れてその切れ目に飛び込んだ。
そのすぐ後に、切れ目は、何かに殴られたように、ぐにゃっと曲がって閉じた。

メフィスト
（…まあいいでしょう。
次に確実にしとめればいいのですから。）

そういうとダークメフィストは、ダークフィールドから去った。

～ダークフィールド外～
そこでは、ハイパーストライクチェスターが、ダークフィールドに突入しようとしていた。
そのとき、突然空中に切れ目が入り、そこから、ネクサスを左の鞭に巻きつけたグドンさんが飛び出した。

平木
「グドンさん!?」
孤門
「それに…副隊長!?」
グドン

「脱出成功！
あらよっと！！」

グドンさんは、右の鞭をハイパー・グドンウィップにし、切れ目を叩き閉じた。

グドン
「ふ…ひとだんらくー」

ハイパーストライクチェスターは着陸し、和倉、平木、孤門、姫矢が降りてきた。

平木
「グドンさん！！」
グドン
「へ？
あれ、もしかして、ウルトラマンの仲間？」
和倉
「ああ、そうだ。」
グドン
「んじゃ、はいこれ。」

そういうとグドンさんは、ネクサスを地面に置き、鞭を解いた。
その瞬間、ネクサスは変身が解け、西条に戻った。

和倉
「西条！」
孤門
「副隊長！」

孤門たちが駆け寄り、和倉が抱きかかえる。

和倉
「気を失っているが、ダメージはかなり大きいな。」
平木
「グドンさん、一体何が？」
グドン
「あー、確か、ダークメフィストだったっけな？
そいつにやられてた。」
姫矢
「ダークファウストに続いて、あいつまで復活したのか…」
グドン
「とりあえず俺は帰るわ。
そんじゃー。」

そしてグドンさんは、地中に潜っていった。

～翌日～
突如、ダークメフィストが出現した。
しかしダークメフィストは、何かを待つように動かなかった。
ナイトレイダーは、クロムチェスターで現場に到着した。

姫矢
「なぜ動かない…？」
孤門
「何を待ってるんだ？」
平木
「あ、あれ！」

平木が指差した方向を見ると、地面が突然盛り上がり、グドンさんが現れた。

グドン
「グッドモーニーング♪
さわやかな朝だねー♪
で、どうしたんだ?そんなところに突っ立って。」
メフィスト
(待っていたのですよ、貴方を。)
グドン
「そうだねー、暇だし、昨日の続きでもしようか。」
メフィスト
(ふふ…喜んで。)

そしてダークメフィストは、ダークフィールドを展開した。

グドン
「げ、やられた。」
メフィスト
(この状況で、勝てますか?)
グドン
「ま、勝つしかないっしょ。」

~ダークフィールド内~
メフィストツインソードとハイパー・グドンサーベルが何度もぶつかり合い、激しい音を鳴らす。

メフィスト

（ふっ、なかなか素早いですね。
尻尾つきの怪獣だと、少し甘く見ていたようですね。）
グドン
「そうかい。
じゃあ罰として逝け！」
メフィスト
（その言葉、そのまま貴方にお返しします！）

そしてまたぶつかり合う。
しかし、流石のグドンさんも、少し疲れが見えてきた。

グドン
「ふー、朝っぱらからの運動はきついなー…」
メフィスト
（なら、もうそろそろ楽になりませんか？）
グドン
「それはやだ。」
メフィスト
（答えは聞いてませんよ。
ソードレイ・シュトローム！）
グドン
「ギャアアアアア！？」

ソードレイ・シュトロームを食らってしまったグドンさんは、ぶっ倒れてしまった。
しかしグドンさんはすぐに起き上がった。
しかも気迫が変わっている。

グドン
「いってー…

こりゃ、本気で行かないと死んじゃうな。」
メフィスト
（無駄ですよ。
このフィールドに入った時点で、貴方に勝ち目はない。）
グドン
「どうかね。
出でよ！フェイトシザース！」

グドンさんがそう叫ぶと、どこからともなく謎のカニっぽいメカが飛んできた。
そのメカはグドンさんの周りを一周すると、グドンさんの後ろで分離し、二本のアームは肩に、二つのジェットは両腕に、残ったバックパックは背中に装着された。

フェイトグドン
「装着完了！フェイトグドン！！」

メフィスト
（そんなものが、なんになるというのですか？）
フェイトグドン
「勝機、いや、勝利になるの。」
メフィスト
（なっ…！？）

フェイトグドンは、いつの間にダークメフィストの後ろにいた。
あわててメフィストツインソードで切り払うが、フェイトグドンは一瞬で移動していた。

メフィスト
（くっ…何故！？）

フェイトグドン
「背中のおかげ。
まだまだ行くよー♪」

そういうとフェイトグトンは、ハイパー・グドンサーベルを構える。

フェイトグドン
「ハイパー・グドンサーベル光速切り！！」
メフィスト
（ぐううううっ！？）

フェイトグドンは、一瞬でダークメフィストを斬りつけた。
当然、ダークメフィストは吹っ飛ぶ。

メフィスト
（くっ…これが…こいつの真の力だというのですか…！）
フェイトグドン
「そういうことだよ。
じゃ、終わろうか。」

そして、フェイトグドンの顔が、今度こそ本気になる。
背中のバックパックが火を噴き、一瞬でダークメフィストの前に立つ。

フェイトグドン
「食らえ！！
フェイトアームスラッシュ！！」

肩のアームが、ダークメフィストを斬りつける。
そのアームの切れ味は、とてつもないものだ。

メフィスト
（ぐあああああっ！？）
フェイトグドン
「次いくぞー！！
光速鞭ラッシュ」！！

目に見えないスピードで、ダークメフィストを叩きつけていく。

メフィスト
（ぐううううっ！
…ふっ…）
フェイトグドン
「何笑ってんだよ！！」
メフィスト
（下手な鉄砲も数撃てばあたる、とは、このことでしょうか。）
フェイトグドン
「へ？
ってぎゃあああああああ！！」

フェイトグドンが突然悲鳴を上げた。
なんと、両腕の鞭が切り落とされていたのだ。
光速鞭ラッシュの中、メフィストツインソードを伸ばし、切り落とした、もとい、切り落とさせたのだ。

フェイトグドン
「ううう…痛すぎる…」
メフィスト
（そのままくたばりなさい！！）

ダークメフィストがメフィストツインソードを構える。
しかし、その後ろには…

孤門
「ハイパーストライクバニッシャー、シュート！！」

ハイパーストライクチェスターからハイパーストライクバニッシャーが放たれ、ダークメフィストに命中、ひるませた。

メフィスト
（ぐあああああっ！？
おのれ…！）
フェイトグドン
「今だ…
うあああああああああああ！！」

フェイトグドンが両腕に力をこめる。
すると、鞭が、飛び出すように生えた。

メフィスト
（なっ…！？）
フェイトグドン
「はあぁぁぁ…
かなり体力使うんだよな、これ…」
メフィスト
（再生能力…何故…！？）
フェイトグドン
「これぐらいできなきゃ、最強なんて呼ばれないんだよ！！」

そしてフェイトグドンが、口を大きく開ける。

すると、光が口にどんどん集まっていった。

フェイトグドン
「フェイト・メーサーバスター！！」

口に集まった光が、超強力光線となり、ダークメフィストに向けて一気に放たれ、ダークメフィストに直撃した。

メフィスト
（ぐあああああああああっ！！）

ダークメフィストは、仰向けに倒れた。

フェイトグドン
「チェックメイト、だ。」
？
「ほう、やるではないか。」
フェイトグドン
「誰！？」

フェイトグドンが振り向くと、そこにビーストバルタンが立っていた。

バルタン
「お前がグドンか。
ダークメフィストを破るとは、相当な実力だな。」
フェイトグドン
「お前もやるのか！？」
バルタン
「いや、俺はこいつを連れ帰りに来ただけだ。

だが、いずれお前と闘う事になるかもしれんな。
そのときを楽しみにしていよう。
フッフォッフォッフォッフォッフォッフォッ…」

ビーストバルタンは、ダークメフィストをつれて消えた。
それと同時に、ダークフィールドも消滅した。
そしてフェイトグドンは、装着を解除し、グドンさんに戻った。

グドン
「今日はマジで疲れた…
さっさと帰って寝よ…」

そしてグドンさんは、さっさと地中に潜っていった。

平木
「あれが…グドンさんの本気の力…」
姫矢
「底知れぬ力、というわけか。」
孤門
「グドンさん、味方になってくれたんですよね。」
和倉
「ああ、そのはずだ。」

そして、ハイパーストライクチェスターは、フォートレスフリーダムに帰還した。

Ｅｐｉｓｏｄｅ６　助太刀ーフェイトグドンー（後書き）

次回予告

バルタン
「こいつはそう簡単にはいかんぞ。」
和倉
「グランテラの強化体か…」
西条
「あいつには、私の剣でも近づけなかった…」
平木
「私も…ウルトラマンに…！！」

「Ｅｐｉｓｏｄｅ７　銃ースリンガーー」

ネクサス
（これが…私の…）

Ｅｐｉｓｏｄｅ７　銃ー スリンガーー

～ビーストフィールド内～

バルタン

「前回の戦いで、ダークメフィストは重傷、しばらく戦闘不能、か…
まったく、どいつもこいつも、勝ったと思ったら負けやがって…
ならばこいつを使ってみるか…
何をも近づけず、全てを焼き払う、「要塞獣」をな…」

ビースト出現の報を受け出動したナイトレイダーは、街に向かって進行するグランテラを発見した。

和倉

「攻撃開始！！」

クロムチェスターが各機、攻撃を開始する。

孤門

「クアドラブラスター、シュート！」

平木

「メタルレーザー、シュート！」

クロムチェスターγ、δが攻撃するが、グランテラはものともせず進む。

孤門「効いていない…！」

西条「なら、私が行く。」

そういって、西条は、エボルトラスターを抜き、ネクサスに変身した。
ネクサスはすぐにジュネッスブレイブに変身、そして、シュトロームセイバーを抜き、グランテラに向かっていく。

ネクサス
（はあああああっ！）

シュトロームセイバーですれ違いざまにグランテラを斬り付け、グランテラが振り向いたところを連続で斬り付け、ジュネッスブレイブキックで吹っ飛ばした。

グランテラ
「キィイイイイイイイイイ！」

グランテラは腹部の気門を開放し、火球を連射する。
ネクサスはそれをセイバーアームドネクサスから発するシュトロームシールドで防御し、シュトロームセイバーに光を集める。

ネクサス（セイバーレイ・シュトローム！）

光の刃がグランテラを真っ二つに斬り裂き、グランテラは爆発した。

ネクサス
（あっけなさすぎる…）

バルタン
「だろうな。

そいつは確認用だからな。」

突如、ネクサスの背後にビーストバルタンが現れた。

ネクサス
（ビーストバルタン…！）

バルタン
「だが、こいつはそう簡単にはいかんぞ。」

そういって、ビーストバルタンが右手を上げる。
すると、ビーストバルタンの前に、グランテラが召喚された。
しかし、そのグランテラには、以前のグランテラとは異なる点がいくつかあった。
外皮は真っ黒で、両肩に気門が供えられていた。

姫矢
「こいつは…！？」

和倉
「グランテラの強化体か。
あの外皮の色からして、強度は相当増しているだろう。」

平木
「それじゃあ、チェスターの攻撃は…」

孤門
「ハイパーストライクバニッシャーですら、効くかどうか…」

バルタン
「貴様らに、このバスターグランテラが倒せるか？」

ネクサス
（…倒すしかないんでしょ。）

そういって、ネクサスは、セイバーレイ・シュトロームを発射した。
それはバスターグランテラに直撃したが、バスターグランテラには傷一つついていない。

ネクサス
（流石に、一筋縄ではいかないわね…
なら…！）

ネクサスは、バスターグランテラにオーバーセイバーレイ・シュトロームを叩き込もうとした。
しかしバスターグランテラは、手、尾部、腹部の気門、そして両肩の砲台からの一斉掃射で対抗する。
その弾幕はすさまじく、ネクサスもシュトロームシールドで防ぐのが精一杯だった。

ネクサス
（くっ…攻撃が激しすぎる…！）

バルタン
「そろそろ仕舞いにしてやれ、バスターグランテラ。」
バスターグランテラ
「グァアアアアアアア！」

バスターグランテラは、背中から格納式の巨大気門を出現させ、ネクサスに向け発射した。
その巨大火球は、シュトロームシールドを一撃で打ち砕いた。

ネクサス（ぐあああああっ！？）

吹っ飛んだネクサスに止めをさそうと、バスターグランテラが両手

に火球をチャージする。

平木
「させるか！」

平木がアビロックを、バスターグランテラの顔に命中させた。
これには、流石のバスターグランテラもひるんだ。

和倉
「よくやった、平木！
西条、一旦退くんだ！」

ネクサスはうなずき、バスターグランテラが苦しんでいる間に飛び去った。
チェスターも、全機撤退した。

バルタン
「退いたか…
今の奴らにとっては、最善の選択、か…
俺たちも帰るとするか、バスターグランテラ。」

バスターグランテラ
「グァアアアアアア」

ビーストバルタンとバスターグランテラは、ビーストフィールドに消えていった。

～フォートレスフリーダム　コマンドルーム～
ナイトレイダーは、バスターグランテラへの対応を検討していた。

西条
「あいつには、私の剣でも近づけなかった…」
姫矢
「あの外皮には、おそらくオーバーレイ・シュトロームも効かないだろうな…」
和倉
「…そういえば、平木はどこへ行った?」
孤門
「ちょっと外に出る、って言ってましたけど。」
西条
「…様子を見に行ってくる。」

西条は、ダムの上で平木を見つけた。

西条
「こんなところで何しているの?」
平木
「…私がネクサスになったら、あいつに勝てるのかな、って…」
西条
「じゃあ、これを持ってみて。」

そういって、西条は平木に、エボルトラスターを手渡す。
しかし、エボルトラスターは、全く反応しなかった。

西条
「貴方はまだ、デュナミストにはなれないみたいね。」
平木

「ですよね、はは…」
西条
「でも、誰もがデュナミストになる可能性を持っている。
貴方も、きっといつかなれるわ。」
平木
「本当ですか!?」
西条
「ええ、誰かがあなたを選べば、ね。」

そのとき、通信が入った。

和倉
「平木!西条!
バスターグランテラが現れた!
すぐに戻ってこい!」
西条・平木
「「了解!」」

西条と平木は、すぐにコマンドルームへ走った。

西条
「バスターグランテラは!?」
孤門
「今、グドンさんが食い止めているところです!」
和倉
「俺たちもすぐに行くぞ!」

ナイトレイダーは、素早く装備を整えていく。

西条

「姫矢。」
姫矢
「何だ？」
西条
「これ、一応貴方に。」
西条は、エボルトラスターを姫矢に手渡した。
姫矢「わかった。」
姫矢がエボルトラスターを受け取ると、エボルトラスターが一瞬光った。
そして、全員クロムチェスターに乗り、出撃した。
～バスターグランテラ出現現場～
バスターグランテラ
「グァアアアアア！！」
グドン
「何こいつ！？硬っ！！
ハイパー・グドンサーベルが全然効いてないし！」
グドンがハイパー・グドンサーベルでバスターグランテラを何度も斬り付けるが、バスターグランテラには通用していない。
バスターグランテラは、腹部の気門を開き、グドンさんに向け発射した。
グドン
「ギャアアアアアアア！？
何こいつ本当に動物なのかーー！？」

そこへ、クロムチェスターが到着する。

和倉
「グドンさんを援護だ！」

クロムチェスターが攻撃を開始するが、やはり全く効いていない。

グドン
「あ、ナイトレイダー。」
バスターグランテラ
「グァアアアアアア！」

バスターグランテラが、チェスターに向け、火球を放つ。。

姫矢
「くっ！」

姫矢がエボルトラスターを抜き、ネクサスに変身した。
もちろん、すぐにジュネッスになる。

ネクサス（クロスレイ・シュトローム！）

ネクサスはクロスレイ・シュトロームを放つが、バスターグランテラを押したものの、ダメージにはならない。

ネクサス
（やはりだめか…）
バスターグランテラ
「グァアアアア！」

バスターグランテラが一瞬の隙をつき、全身からの火球でネクサスを攻撃する。

ネクサス
（ぐあああああっ！）

そしてとどめに、背中の巨大気門でネクサスを撃った。
ネクサスは吹き飛び、そのまま変身が解けてしまった。

孤門
「姫矢さん！」

そしてバスターグランテラは、腹部の気門を連射し、クロムチェスター全機を次々と撃墜した。

西条
「くっ…！？」
和倉
「くそっ…！」
平木
「きあああああっ！？」
孤門
「うわあああああああっ！？」

クロムチェスターは全機不時着する。
そして孤門がチェスターδから降り、姫矢に駆け寄る。
平木も降りてきて、それに続く。
だがそこへ、バスターグランテラが止めをさそうと近づいてくる。
それを見た平木は、姫矢が握っていたエボルトラスターをとり、両

手で握り締めて祈った。

平木
（お願い…私にも…光を…！！）

孤門「平木隊員！」

呼ばれて平木が顔を上げると、バスターグランテラが平木に向け、火球を発射していた。
間に合わない…誰もがそう思った。

そのときだった。

エボルトラスターが光り、平木を包んだ。

平木が目を開けると、いつの間にか森の中におり、目の前に謎の石碑が鎮座していた。

平木
「もしかして…！」

平木は、そっとその石碑に触れた。
その瞬間、平木は再び光に包まれた。

平木が再び目を開けると、エボルトラスターが心臓の鼓動のような音と共に明滅していた。

平木

「私にも…光が…！！」

平木は立ち上がると、エボルトラスターを鞘から勢いよく引き抜いた。
そして平木は、ウルトラマンネクサス・アンファンスに変身した。

平木
「平木隊員が…ウルトラマンに…」
姫矢
「あいつにも…光が…」

ネクサス（じゃあ、早速！）

ネクサスは、ジュネッスに変身する。
その姿は、もちろん新しい姿だった。

これこそ、平木のジュネッス、「ジュネッススリンガー」である。

ネクサス
（これが…私のジュネッス…）

バスターグランテラ
「グァアアアアア！」

ネクサス
（よし、まずは！）

ネクサスがメタフィールドを展開する。

～メタフィールド内～
バスターグランテラの火球を、ネクサスは右腕のバスターアームドネクサスから放つ光弾「シュトロームバスター」で相殺していく。
バスターグランテラは、腹部の気門を開き、一斉に発射してくる。
ネクサスはそれをすばやくかわし、シュトロームバスターで、気門を一つずつ潰していった。

バスターグランテラ
「グァアアアアアアアアア！？」
ネクサス
（外は硬くても、中はそうでもないんだね！）

そして両肩、尻尾の先端、と全ての気門を潰し、バスターグランテラが苦しがっている隙に、バスターアームドネクサスにシュトロームエネルギーを集める。

ネクサス
（バスターレイ・シュトローム！）

バスターアームドネクサスから放たれた必殺光弾は、見事バスターグランテラの腹部に命中し、かなりのダメージを与えた。
やけくそになったバスターグランテラは、背中の巨大気門を向ける。
ネクサスも、必殺技の構えを取る。
そしてバスターグランテラが巨大火球を発射した瞬間、ネクサスも発射した。

ネクサス（オーバーバスターレイ・シュトローム！！）

バスターアームドネクサスから放たれた必殺光線は、バスターグラ

ンテラの弾を押し返し、弾と共に巨大気門に直撃し、バスターグランテラは爆発した。

ネクサス
（よし！勝った！）

そしてネクサスはメタフィールドを解き、飛び去った。

～ビーストフィールド内～
バルタン
「ちっ、また新たなデュナミストが誕生したか…
…どうやらそろそろ、俺が出なければならなくなってきたか…
いいだろう…直々に相手をしてやろう、ウルトラマン…！」

Ｅｐｉｓｏｄｅ７　銃ー スリンガーー（後書き）

次回予告

バルタン
「正々堂々、勝負といこうか、ネクサス！」
ネクサス
（望むところ！）
孤門
「あれが、ビーストバルタンの力…」
和倉
「早すぎる！」
バルタン
「どうした？
もう終わりか？」

「Ｅｐｉｓｏｄｅ８　決戦ーフェアウェルー」

バルタン「終わりだ！ネクサス！！」

Ｅｐｉｓｏｄｅ８　決戦ーフェアウェルー

～ビーストフィールド～
バルタン
「いよいよ勝負のとき、か…
俺の力、存分に見せ付けてやろう、ウルトラマン…！」

そう言うとビーストバルタンは、ビーストフィールドを出た。

ビースト出現の報を受けたナイトレイダーは、すぐさまクロムチェスターで出撃した。

～ビースト出現現場～
孤門
「あれは…ビーストバルタン…！」
姫矢
「とうとう来たか…」
西条
「決着を付けるきね…」
平木
「絶対倒してやる！」
和倉
「ビーストバルタンを倒せば、スペースビーストの進撃も収まるだろう。
なんとしても、奴を倒すんだ！」

全員
「「「「了解！」」」」

バルタン
「来たか…ナイトレイダー。
さて…最初に変身するのは誰だろうな。」

クロムチェスターα、β、γ、δは、それぞれレーザーをビーストバルタンに向け発射する。
しかし、ビーストバルタンは瞬間移動でそれを全てかわした。

バルタン
「ほう…面白い。」

孤門・平木
「「アビロック、ファイア！！」」

クロムチェスターγ、δがマイクロミサイルを発射するが、ビーストバルタンは円形状のバリア、ダークディフェンサーを作り出し、それを防御した。

バルタン
「甘いな…」

西条
「バニッシャーレーザーキャノン！」
和倉
「メガレーザー！」
西条・和倉
「「シュート！！」」

クロムチェスターα、βがレーザーを放つが、ビーストバルタンは反対側の手でダークディフェンサーを形成し防御する。

バルタン
「無駄だ…そんな小道具、俺には通らん…
紫色怨念破壊光弾!!」

ビーストバルタンの両腕の鋏から、ビーストフィールドに蓄積していた、倒されたビーストたちの怨念が込められた紫色の破壊光弾が放たれ、クロムチェスターα、βを連続で撃墜した。

孤門
「隊長!副隊長!」

クロムチェスターα、βはなんとか不時着する。

バルタン
「お前らもだ!!」

ビーストバルタンは再度紫色怨念破壊光弾を放ち、クロムチェスターγ、δを撃墜した。

孤門
「うわあああっ!?」
平木
「きゃあああああっ!?」

クロムチェスターγ、δも不時着し、姫矢がδから降りる。

姫矢「俺が行く！」

姫矢はエボルトラスターを抜き、ウルトラマンネクサス・アンファンスに変身した。

バルタン
「来たか…
正々堂々、勝負といこうか、ウルトラマン！」
ネクサス
（望むところだ！）

ネクサスはジュネッスに変身し、ビーストバルタンに向かって走り出し、飛び蹴りを繰り出す。
だが、ビーストバルタンは一瞬でその後ろに移動していた。

ネクサス
（なっ…！？）
バルタン
「遅いな…」

ビーストバルタンは、思い切りネクサスを蹴りつける。

ネクサス
（ぐっ…！）

ネクサスは振り返って蹴りを繰り出すが、ビーストバルタンはそれを叩き落とし、鋏で突きを食らわせる。
ビーストバルタンはゆっくりとネクサスに歩み寄ると、ネクサスのパンチを受け流して、ネクサスの背中に裏軒を叩き込む。

ネクサスは振り向きざまにパーティクル・フェザーを放つが、ビーストバルタンは鋏で弾き、すかさず紫色怨念破壊光弾を放って、ネクサスを吹っ飛ばした。

ネクサス
（ぐあああああああああっ！？）
バルタン
「この程度なのか？…ウルトラマン…
だとすれば…とてつもない期待はずれだな。」
ネクサス
（まだだ…まだ終わってはいない！）
バルタン
「フフフ…そうだ…そうでなければ、俺が決戦を挑んだ意味がない！！」

ビーストバルタンが高速移動を開始する。
ネクサスはマッハムーブで対抗するが、ビーストバルタンの速さにはあと一歩及ばない。

ネクサス
（くそっ…速い…！）
バルタン
「捕らえてみろ…俺の動きを！！」

ネクサスは、パーティクル・フェザーを放つが、ビーストバルタンはそれをことごとくかわす。

ネクサス
（だめだ…追いつけない…！）
バルタン

「遅いな…終わりだ！
バルタニック・ジャビローム！」

ビーストバルタンが鋏から暗黒光線を発射し、ネクサスに命中する。

ネクサス
（ぐあああああああああああっ！？）

ネクサスは吹っ飛び、変身が解けてしまった。

姫矢
「く…そっ…」
西条
「姫矢！」

西条が姫矢に駆け寄り、姫矢はエボルトラスターを差し出す。
西条はそれを受け取り、エボルトラスターが一瞬光ったのを確認すると、鞘から抜き、変身する。

ネクサス
（今度は…私が相手よ…！）

ネクサスは、ジュネッスブレイブに変身する。
そして、シュトロームセイバーを抜き、構える。

バルタン
「次は剣士か…来い！」
ネクサス
（言われるまでもない！）

ネクサスがビーストバルタンに斬りかかる。
だが、ビーストバルタンは高速移動でかわす。
ネクサスはマッハムーブで追いかける。
今度は追いついた。
それに気づいたビーストバルタンは、ネクサスから距離をとる。

バルタン
「ほう…追いついたか。
やるな…！」
ネクサス
（これ以上は…負けない！
セイバーレイ・シュトローム！）

セイバーレイ・シュトロームを、ビーストバルタンはいとも簡単に蹴り払う。

バルタン
「甘いな…
この程度では、俺は破れんぞ…！」
ネクサス
（ならば…全力をぶつけるだけ！！
オーバーセイバーレイ・シュトローム！！）

ネクサスは、オーバーセイバーレイ・シュトロームを、ビーストバルタンに叩き込む。
ビーストバルタンは、右手の鋏から紫色の光の剣、バルタニック・ブレードを出し、それを受け止める。

バルタン
「くっ…！」

ネクサス
（はあああああああああっ！！）

ネクサスは、バルタニック・ブレードごと、ビーストバルタンを叩き斬った。

バルタン
「ぐっ…！？
　ようやくダメージか…」
ネクサス
（まだまだ！）

ネクサスは、間髪入れずに、次々に斬りつけていく。

ネクサス
（はあっ！）
バルタン
「ぐうっ…！」

だが、ビーストバルタンも、やられてばかりではない。
両腕のハサミから、バルタニック・ブレードを出し、応戦する。
二刀流のビーストバルタンに、少しずつ押されていくネクサス。

ネクサス
（くっ…！）
バルタン
「形勢逆転だな。
　貴様も終わりだ！」
？
「させっかー！」

ビーストバルタンの真下の地面から、グドンさんが飛び出し、ビーストバルタンを退けた。

バルタン
「現れたか…グドン！」
グドン
「ああ来たよ！
出でよ！フェイトシザース！」

フェイトシザースが何処かから飛んできて、分離し、グドンさんに装着された。

フェイトグドン
「装着完了！フェイトグドン！！
行くぞ！ウルトラマン！」
ネクサス
（ええ…！）
バルタン
「面白い…まとめてかかって来い！！」

そして、ネクサスとフェイトグドンは、ビーストバルタンに向かって走り出した。
ネクサスのシュトロームセイバーと、フェイトグドンのハイパー・グドンサーベルを、ビーストバルタンは同時に受け止める。
そして、同時に押し返し、二人を連続で切りつけ、距離をとる。

ネクサス
（くっ…！）
フェイトグドン

「いってー…」
バルタン
「まだまだだ！」

ビーストバルタンは、二本のバルタニック・ブレードを鞭状のバルタニック・ウィップに変えると、ネクサスとフェイトグドンを弾き飛ばした。

ネクサス
（ぐあああああああっ！）
フェイトグドン
「ギャアアアアアアアアアア！？」

倒れたネクサスは、すぐに起き上がる。
が、その後ろに、一瞬でビーストバルタンが現れる。

バルタン
「まだ…遅い…
バルタニック・ジャビローム！！」
ネクサス
（ぐあああああああああっ！？）

後ろから直撃されたネクサスは、変身が解けてしまった。

バルタン
「結局…この程度か…」
フェイトグドン
「まだじゃあああああああああ！！」

フェイトグドンがハイパー・グドンサーベルを振り下ろすが、ビー

ストバルタンは難なくそれをかわす。

バルタン
「後はお前だけだ…グドン。」
フェイトグドン
「ずいぶんと余裕だなー。
その余裕ごと、ぶっ潰す！！」

そして、二人同時に走り出す。
スピードは、フェイトグドンが勝っていた。

フェイトグドン
「お前も遅いじゃん。」
バルタン
「ほう…なめてくれるな…！」

ビーストバルタンは、分身し、フェイトグドンを囲む。
そして、鋏を一斉にフェイトグドンに向ける。

フェイトグドン
「やばっ！？
なんてな！！」

フェイトグドンは、ハイパー・グドンサーベルで、回りの分身を一掃した。

バルタン
「お前は一筋縄では行かないか…」
フェイトグドン
「隙あったー！

ハイパー・グドンサーベル光速切り！！」

バルタン

「ぐおおおおおっ！？」

流石のビーストバルタンでも、フェイトグドンの光速に達する動きを捉え切れなかったようで、斬りつけられて吹っ飛ばされた。

バルタン

「くっ…油断したか…」

フェイトグドン

「そのまま決めてやる！

ハイパー・グドンメー…」

？

「…ザギインフェルノ！」

フェイトグドンがとどめの一発を放とうとしたまさにその瞬間、黒い炎の塊がフェイトグドンを襲った。

フェイトグドン

「ギャアアアアアア！？」

その炎の塊は、一発でフェイトグドンを気絶させてしまった。。

和倉

「なっ…！？」

平木

「グドンさんが…一発で！？」

孤門

「あ、あれは…」

？

「何をしている…」

バルタン

「ふん、ようやく目覚めたか…」

そこに立っていたのは、真っ黒な体に赤いライン、そして胸に輝く赤いエナジーコア…

そう、最強にして最悪の暗黒巨人だった。

孤門
「ダーク…ザギ！？」

Ｅｐｉｓｏｄｅ８　決戦－フェアウェル－（後書き）

次回予告

ザギ

（弱すぎる…

カスにも満たない…）

和倉

「何なんだ…この力は…」

バルタン

「これが…最強最悪の力か…

甦らせて正解だったな…」

平木

「このままじゃ…みんな…」

「Ｅｐｉｓｏｄｅ９　最凶－ザギ－」

ザギ（全てを…無に帰してくれよう…）

Ｅｐｉｓｏｄｅ９　最凶ーザギー

ついに訪れた、ビーストバルタンとの決戦。
ビーストバルタンはネクサスを相手に、その実力を見せつけ、圧倒する。
そこへ加勢に現れたフェイトグドンにより、戦況は好転したかに見えた。
しかし、突如そこへ最強最悪の暗黒巨人、ダークザギが現れ、フェイトグドンを一撃で倒してしまった。

ザギ
（弱すぎる…
カスにも満たない…）
平木
「嘘…グドンさんが…一撃で…」
バルタン
「まさか…フェイトグドンを一撃で倒すとは…
これが…最強最悪の力か…
甦らせて正解だったな…」

平木が西条からエボルトラスターを受け取り、構える。

平木
「勝てるかわからないけど…やるしかない！」

平木はエボルトラスターを抜き、ウルトラマンネクサス・アンファンスに変身した。

ザギ

（いつでも来い…）
ネクサス
（なら早速…！）

ネクサスは、ジュネッススリンガーに変身し、バスターアームドネクサスを構える。

ザギ
（やはり、お前は射撃系か…）

そういっている間に、ネクサスはシュトロームバスターを放つ。
しかし、ダークザギには全く効いていない。

ザギ
（この程度か…？）
ネクサ
（そんなわけないでしょ！
バスターレイ・シュトローム！）

シュトロームエネルギーを集中させてはなった光弾が、ダークザギに直撃する。
しかし、傷一つついていない。

ネクサス
（そんな…）
ザギ
（弱すぎるな…つまらん…）
ネクサス
（なら、これで一気に…！
オーバーバスターレイ・シュトローム！！）

バスターアームドネクサスから放った強力な光線が、一直線にダークザギに向かって突き進む。
しかし、あたる直前に、ダークザギも光線を放った。

ザギ
（…グラビティ・ザギ！）

放たれた超重力光線は一瞬でオーバーバスターレイ・シュトロームを押し返し、ネクサスに直撃した。

ネクサス
（きゃあああああああっ！）

グラビティ・ザギが命中したネクサスは、変身は解けてしまった。
平木にすばやく和倉が駆け寄る。

ザギ
（全てを…破壊してやる…）

そういうとダークザギは、グラビティ・ザギを放とうとした。

フェイトグドン
「させっかあああああああ！！」

フェイトグドンが、音速で体当たり攻撃をした。
ダークザギはよろめいて、和倉たちから離れた。

ザギ
（死に底ないが…黙ってくたばっていればいいものを…）

フェイトグドン
「死に底ないって言うなあああああああ！」

フェイトグドンはハイパー・グドンサーベルで斬りかかるが、ダークザギはそれを余裕でかわし、蹴り飛ばす。

フェイトグドン
「くっ…まだまだあああああああ！」

フェイトグドンは再びハイパー・グドンサーベルで斬りかかるが、ダークザギはそれを素手で受け止める。

フェイトグドン
「な！？」
ザギ
「フン…」

そして、ザギ・シュートを放ってフェイトグドンを吹き飛ばした。

フェイトグドン
「ギャアアアアアアアア！？」
ザギ
（邪魔だ…まず貴様から消そう…）

そういうとダークザギは、ライトニング・ザギの構えを取った。

平木
「やめてえええええええええ！！」
ザギ
（…ライトニング・ザギ！）

そして、ダークザギの腕から、超絶暗黒稲妻光線が放たれた――――

フェイトグドン
「ギャアアアアアアアアア！？」

フェイトグドンに当たって出た光が消えたとき、そこにフェイトグドンの姿はなかった。
残っていたのは、フェイトグドンの肩のアームの片方だけだった。

平木
「いやあああああああああ！！」

和倉
「そんな…」

ザギ
（これで…後はウルトラマンだけだ…）

そしてダークザギは、再び和倉たちのほうを向く。
そのとき、孤門がエボルトラスターを取り、ダークザギの前に立った。

ザギ

（お前は…あのときの…）

孤門は、エボルトラスターを握り締めて言った。

孤門
「…頼む…僕に…もう一度光を…！」

ザギ
（目障りだ…グラビティ・ザギ！）

そして、ダークザギの手から、超重力光線が放たれた――――――

孤門
「僕は…絶対に…諦めない！！」

その瞬間、超重力光線が直撃した。
しかし、そこからまばゆい光が放たれた。

平木
「あれ…は…」
和倉
「ああ…間違いない…」
ザギ
（……現れたか…）

その光が消えたとき、そこに立っていたのは…

ウルトラマンノアだった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ９　最凶ー ザギ ー（後書き）

次回予告

ザギ

（現れたか…ノア。）

ノア

（ダークザギ…お前は絶対に許さない！！）

ザギ

（許される筋合いなどない…

会話はここまでだ…）

ノア

（ああ、そうだな…）

ノア・ザギ

（（勝負だ！！））

「Ｅｐｉｓｏｄｅ１０　奇跡ー ノア ー」

バルタン

「全て…順調だ…」

Ｅｐｉｓｏｄｅ１０　奇跡－ノア－

圧倒的な力で、ネクサスはおろか、フェイトグドンまでをも倒した、ダークザギ。
そして、その前に立ちふさがる孤門。
それを消し去ろうと、ダークザギはグラビティ・ザギを放つ。
そのとき、グラビティ・ザギの着弾地点から、まばゆい光が放たれる。
その光が消えたとき、そこに立っていたのは…

ウルトラマンノアだった。

ザギ
（現れたか…ノア。）
ノア
（ダークザギ…お前は絶対に許さない！！）
ザギ
（許される筋合いなどない…
会話はここまでだ…）
ノア
（ああ、そうだな…）

ノア・ザギ
（勝負だ！！）

ノアとダークザギが、同時に走り出し、激突する。
ノアがノア・パンチを繰り出すと、ダークザギも同様にザギ・パンチを繰り出し、相殺する。
ノアがノア・キックを繰り出すと、ダークザギはザギ・キックを繰

り出し、打ち消す。
それが繰り返され、二人の動きは、まるで鏡の自分と戦っているようだった。
そして二人は、一時間を取る。

ノア
（ノア・インフェルノ！）
ザギ
（ザギ・インフェルノ！）

二人がインフェルノを同時に出す。
二つのインフェルノがぶつかり、爆発する。
その煙から、ノアとダークザギが同時に現れ、拳が同時にぶつかる。

ザギ
（やるな…やはり…）
ノア
（お前に…負けるわけにはいかないんだ！）
ザギ
（…あの鞭怪獣を消されたからか…？）
ノア
（お前…！）
ザギ
（…来い…！）

そして二人は、また鏡の戦いをはじめる。
両者とも、傷つく様子はない。

ノア
（くそおおおっ！！）

ザギ
（はあああっ！）

二人が同時にパンチを出す。
それは、わずかにずれ、両者に当たる。

ノア
（くっ…やっと…当たった…）
ザギ
（一発だけで…いい気なものだ…）
ノア
（当てる…当てて見せる！）

ノアが次々と攻撃を繰り出す。
だが、ダークザギはそれをことごとく防ぐ。
そのノアの動きは、怒り任せのようだった。

和倉
「あの動き…まずいな…」
平木
「どういう…ことですか…？」
和倉
「孤門は今…怒りに任せて闘っている…
あのままでは、体力が持たない…！」
平木
「じゃあ…もしそうなったら…」
和倉
「勝ち目は…無い…！」
平木
「そんな…！」

なおもノアは、攻撃を続ける。
そして、ついに疲れが見えてきた。

ノア
（はあ…はあ…）
ザギ
（そろそろ…終わりか…？）
ノア
（まだ…まだだ！）
ザギ
（無駄だ…もうすぐお前は終わる…
お前は完全にはまった…）
ノア
（どういうことだ…！）
ザギ
（お前の体力はもはや限界…
かつてこの俺を消し去ったお前であろうと…勝ち目は…無い！）
ノア
（なに…！？）

ダークザギの言うとおり、ノアのエナジーコアが点滅していた。

ザギ
（今度は俺がお前を消す番だ…覚悟しろ…ノア！！）

ダークザギが、ライトニング・ザギを放とうとした。
そのときだった。

？

「はい、だめーー！！」

地中から、光の鞭が飛び出した。

ノア
（この鞭…そしてこのパターン…まさか！？）
？

「ふふふ…そのとおり！！」

地中から、怪獣が飛び出した。
そう、その怪獣は…

グドン
「細胞のひとかけらで地中にもぐって、そこで全身を再生したグドンさん参上！！」

そして、自己再生していたフェイトシザースが飛来し、分離、装着された。

フェイトグドン
「装着完了！フェイトグドン！！
ウルトラマン、お前少し休んでろ！」
ノア

（でも…）
フェイトグドン
「休んでろって言ってるだろ！！」
ノア
（…わかった。）

そういうとノアは、空へ飛び去った。

フェイトグドン
「よーし…
行くぞ！ダークザギ！！」
ザギ
（死にぞこないが…いいだろう…
今度こそ抹消してくれる…！）

ダークザギとフェイトグドンの戦いが始まった。
フェイトグドンの動きは、最初とはまるで違っていた。

ザギ
（…どうやら、完全に本気になったようだな。）
フェイトグドン
「当たり前だ！
二度も消されてたまるか！」

フェイトグドンは、両腕のハイパー・グドンサーベルで、ダークザギに斬りかかる。
だが、ダークザギはそれをことごとくかわす。

ザギ
（目障りだ…

ザギ・インフェルノ！）
フェイトグドン
「おっと！」

フェイトグドンは、音速でそれをかわす。
だが、瞬時にダークザギは振り返り、ザギ・シュートを放つ。
フェイトグドンは、ハイパー・グドンサーベルで間一髪それを斬った。

フェイトグドン
「あぶね…」
ザギ
（…なかなかやるな。
これがお前の本気か。）
フェイトグドン
「地上最強の名は伊達じゃないぜ！」
ザギ
（なら…その伝説ごと消し去ってくれる…！）
Fグドン
「消えるのはお前じゃあああああああああ！」

再びフェイトグドンがダークザギに斬りかかる。
無論ダークザギは難なくかわす。
しかしフェイトグドンは、腕のジェットで光速に達したもう一方のサーベルで、ダークザギを斬りつけた。

ザギ
（なっ…！？）
フェイトグドン
「ふふふ…俺の腕のジェットをなめるなよ！

流石のお前も、光速は見えないかー。」
ザギ
（くっ…おのれ…！）
フェイトグドン
「これでお前のペースは崩した！
これでこっちのものだぜ！」

フェイトグドンは、大きく間合いを取り、鞭にエネルギーをこめる。

フェイトグドン
「これで一気に決める！
究極鞭クラアアアアアアアッシュ！！」

フェイトグドンは、一瞬でダークザギの後方に移動した。
それと同時に、ダークザギが思いっきり吹っ飛んだ。

ザギ
（ごほっ…！？）
フェイトグドン
「こいつが…真のとどめだ！
ハイパー・グドンサーベル全力斬り！！」

吹っ飛んだダークザギに、フェイトグドンがとどめの追撃をかける。
ハイパー・グドンサーベルに、全ての力をこめて、ダークザギを斬り裂いた。

ザギ
（がはっ…！？）
フェイトグドン
「これで…勝ち…だ…」

フェイトグドンは、力を使い果たし、倒れてしまった。

ザギ
（勝ちだと…笑わせる…！
お前はここで…今度こそ終わる！！）
フェイトグドン
「終わるのは…お前だ…！
そうだろ…ウルトラマン…！」

フェイトグドンがそういうと、その後ろに銀色の巨人が舞い降りた。
そう、ノアだ。
フェイトグドンがダークザギと戦ってる間に、宇宙へ飛行し、太陽光を浴びて回復してきたのだ。

ザギ
（ノア…！）
ノア
（ザギ…今度こそお前を倒す！！）
ザギ
（一度負けたくせに…いい気になるな…！）
ノア
（確かに、一度は負けた。
だが、二度は負けない…
それに、勝機は、グドンさんが十分すぎるほどに作ってくれた！！）
フェイトグドン
「そういうことだ…
後は任せたぜ…ウルトラマン…！」

そういうとフェイトグドンは、気を失った。
ノアは、ライトニング・ノアの構えを取った。
ダークザギも、対抗してライトニング・ザギの構えを取る。
そして、一瞬の沈黙――――――

ノア
（ライトニング・ノア！！）
ザギ
（ライトニング・ザギ！！）

超絶稲妻光線と、暗黒稲妻光線がぶつかり合う。
だが、超絶稲妻光線のほうが圧倒的に有利だった。

ザギ
（なぜ…なぜだ…！？）
ノア
（少し前の僕と同じ…
お前は体力を消耗している。
グドンさんが、十分すぎるほどにお前の体力を削ってくれた！！）

ノアが、ダークザギを一気に押していく。

ノア
（終わりだ…ザギ！！）
ザギ
（くっ…おのれぇ！！）
ノア
（うおおおおおおおおおおお！！）

超絶稲妻光線が、ダークザギに命中した。

ザギ
（ぬあああああああああああ！！）

ダークザギの断末魔と共に巨大な爆発が起こり、ダークザギは再び倒された。

ノア
（…勝った…）

～ビーストフィールド～
メフィスト
（ザギ様が倒されてしまいましたか…）
バルタン
「構わん…所詮は切り札と見せかけた…捨て駒だからな…」
ファウスト
（なあ…一体何が目的なんだ？
そんなにビーストの怨念を集めて、何をするつもりだ？）

バルタン
「全て…順調だ。
怨念も、十分に集まった。
今こそ…復活のときだ！！
ウォッフォッフォッフ

Ｅｐｉｓｏｄｅ１０　奇跡ー ノアー（後書き）

次回予告

バルタン

「今こそ甦るがいい…」

西条

「ビーストバルタン…何故!?」

グドン

「つ…強すぎだろ…あいつ…」

ネクサス

（お前は…私が斬る!）

「Ｅｐｉｓｏｄｅ１１　根源ー ザ・ワンー」

吉良沢

「ビースト…ザ・ワン…!」

Ｅｐｉｓｏｄｅ１１　根源ーザ・ワンー

～ビーストフィールド～
バルタン
「全て…順調だ…
怨念も、十分に集まった…
今こそ…復活のときだ！！」

ビーストバルタンがそう叫ぶと、ビーストの怨念が一斉に集まり、何かの形になっていった。

メフィスト
（これは…一体…！？）
ファウスト
（な、何になるんだ！？）
バルタン
「今こそ甦るがいい…
最強最悪にして、最初のビースト…
ビースト・ザ・ワンよ！！」

何かの形になっていた怨念が、突如光を発し、その光が消えたとき、そこには一体のビーストが立っていた。

ファウスト
（こ、こいつが…）
メフィスト
（ビースト・ザ・ワン…）
ザ・ワン
「キシャアアアアアアア！！」

バルタン
「さて…俺はもう一つ、やることがある。
ダークメフィスト、ダークファウスト、ちょっと行って削ってこい。」
ファウスト
（削るって…何をだよ？）
メフィスト
（ネクサス、およびグドンの体力でしょう。
さあ、行きますよ。）
ファウスト
（お、おう…）

ダークメフィストとダークファウストは、ビーストフィールドを出た。

バルタン
「さて…始めるか…融合を…」

ダークファウストとダークメフィストの出現の報を受けたナイトレイダーは、クロムチェスターα、β、γ、δで出撃した。
現場に到着すると、すぐにダークファウストを確認した。
そこには、すでにグドンが来ていた。

闇矢
「来ましたか…グドン…ナイトレイダー…」

ダークファウストの肩の上に、闇矢が乗っていた。

平木
「え…姫矢!?
なんであそこに!?」
姫矢
「いや、あいつは俺ではない。
俺の姿をした、ダークメフィストだ。」
平木
「えっ、あれがダークメフィスト!?」

闇矢
「それでは…私も行きましょうか…」

闇矢は、ダークエボルバーを取り出すと、左右に引き伸ばし、ダークメフィストに変身した。

西条
「ダークメフィスト…!」
姫矢
「俺が行く!」

そういうと姫矢は、エボルトラスターを取り出し、鞘から引き抜き、ウルトラマンネクサス・アンファンスに変身した。

グドン
「来たなーウルトラマン。」
ネクサス
(早いものだな、グドンさん。)
グドン
「まあねー。」

メフィスト
（揃ったようですね…）
ファウスト
（くく…盛り上がってきたな…！）
グドン
「そのノリで叩き潰す！」
ネクサス
（同感だな。
俺はダークファウストの相手をするから…）
グドン
「俺はダークメフィスト、だな？」
ネクサス
（ああ、行くぞ！）
グドン
「おっしゃあ！地上最強の力、見せてやる！」
メフィスト
（では、全力で行くとしましょうか。
最初からクライマックスで、ね。）
ファウスト
（くく…俺の本気、今こそ見せてやるぜ！！）

そしてついに、ネクサス対ダークファウスト、グドン対ダークメフィストの闘いの火蓋が切って落とされた。

ダークファウストとネクサスは正々堂々と肉弾戦で勝負し始めた。
グドンとダークメフィストは、ハイパー・グドンサーベルとメフィストツインソードの剣激戦だ。

ファウスト
（ダークレイ・ジャビローム！）

ネクサス
（クロスレイ・シュトローム！）

二つの光線が激突し、相殺する。
ネクサスはその隙にジュネッスに変身し、再び肉弾戦に入る。

一方のグドンとダークメフィストからは、相変わらず、剣と剣がぶつかり合う音が鳴り響いていた。

グドン
「せりゃあああああ！！」
メフィスト
（はあああああああっ！！）

ガキイイイイイイイイイン

グドン
「やっぱやりやがるなーお前はー。」
メフィスト
（ふっ…貴方こそ。
流石に、最強を自称するだけはありますね。」
グドン
「自称じゃねーよ。
周りが勝手にそう呼んでるんだよ。」
メフィスト
（ふっ…
オーバーソードレイ・シュトローム！）
グドン
「ハイパー・グドンサーベル半全力斬り！」

二人の必殺技がぶつかり合った。

メフィスト
（くっ…）
グドン
「今だ！
四分の一追加！！」

ハイパー・グドンサーベルが、メフィストツインソードごと、ダークメフィストを叩き斬った。

メフィスト
（ぐっ…！？）
グドン
「もらった！
食らえ、テニススマッシュ！」

グドンは、テニスのスマッシュの要領で、腕の鞭をダークメフィストに叩き付け、吹っ飛ばした。

メフィスト
（ぐあああああっ！？）

ダークメフィストが吹っ飛び、それと同時に、

ネクサス
（オーバーレイ・シュトローム！）
ファウスト
（ぐわあああああああ！？）

ダークファウストも吹っ飛んだ。

メフィスト
（くっ…おのれ…！）

ファウスト
（やろぉ…）

？

「二人とも、ご苦労。
下がれ。」

ファウスト
（その声は…）

メフィスト
（来ましたか…ビーストバルタン。）

しかし、現れたのはビーストバルタンではなく、あのビーストだった。

ネクサス
（新手か…）

グドン
「なんとなくやばそう…」

和倉
「あのビーストは…まさか…！？」

吉良沢
「…はい、間違いありません。」

和倉
「イラストレーター…！」

吉良沢
「あいつこそ…スペースビーストの根源…
ビースト・ザ・ワン…！」
和倉
「なぜあいつが…！？」
平木
「隊長、あれ…！」

そのザ・ワンの胸には、なんと、ビーストバルタンの顔があった。

西条
「ビーストバルタン…なぜ！？」

バルタン
「くくく…融合したんだよ、こいつとな。
これこそが、ビースト・ザ・ワンの新たなる姿、
「ザ・ワン・バルダブア」だ！」

孤門
「ザ・ワン・バルダブア…！？」
吉良沢
「ザ・ワンと…融合しただと…！？」

ザ・ワン
「この力は絶対だ…
破ることは…誰にも出来はしない…！」
ネクサス
（ならば…俺たちがそれを破る！）
グドン
「俺のサーベルに、斬れぬ物などない！

って勢いで行くぜ！」

ザ・ワン

「フン…愚かな…

力の差をを思い知るがいい！」

ネクサスとグドンは、ザ・ワンに向かって走り出した。

グドンがハイパー・グドンサーベルで、ザ・ワンに斬りかかる。

しかしザ・ワンは、それを容易く受け止め、後ろに投げ飛ばす。

それと同時に、尻尾でネクサスをなぎ払う。

グドンはすぐに起き上がるが、ザ・ワンの尻尾になぎ払われてしまう。

そしてザ・ワンは、起き上がったネクサスに、口から放つ超絶火炎光弾を浴びせた。

ネクサス

（ぐあああああっ！？）

グドン

「つ…強すぎだろ…あいつ…」

和倉

「ウルトラマンとグドンさんを援護する！」

全員

「「「了解！」」」

クロムチェスターが、ザ・ワンを攻撃する。

しかし、ザ・ワンには、全く効いていない。

ザ・ワン

「目障りだ…落ちろ！」

ザ・ワンは、クロムチェスターを打ち落とそうと、超絶火炎光弾を発射する。
クロムチェスターは、それを何とかかわす。
しかし、交わしたところにすかさず発射された火炎光弾が、クロムチェスターδに直撃しようとした。
それを、グドンが、ハイパー・グドンウィップで叩き落した。

ザ・ワン
「ふん、まだ体力は十分にあるようだな。」
グドン
「当たり前だ！」
ネクサス
（まだ、倒れはしない！）
ザ・ワン
「ククク…無駄なあがきだ。
くたばるがいい！！」

ザ・ワンが、ネクサスに超絶火炎光線を発射した。
ネクサスは、サークムシールドで防御するが、数発で打ち砕かれ、命中してしまい、変身が解けてしまった。

姫矢
「くっ…」

ザ・ワン
「ククク…そのまま踏み潰してくれる…」

ザ・ワンが、姫矢を踏み潰そうと迫る。

グドン

「させっかあああああああああ！！」

グドンが、ザ・ワンに体当たりし、姫矢から遠ざけた。
その隙に、クロムチェスターαから西条が降り、姫矢に駆け寄る。

姫矢
「後を…頼む…」

西条は頷くと、姫矢からエボルトラスターを受け取り、ネクサスに変身した。
そして、すぐにジュネッスブレイブに変身した。

ザ・ワン
「次の弾か…速いものだ。」
ネクサス
（お前は…私が斬る！）

ネクサスは、シュトロームセイバーを出し、ザ・ワンに斬りかかった。
しかし、ザ・ワンはまたも容易く受け止め、横に投げ飛し、超絶火炎光弾を発射した。
ネクサスは、ギリギリでそれを斬り払う。

ザ・ワン
「無駄だ無駄だ！」

ザ・ワンは、再び超絶火炎光線を放った。
ネクサスは、オーバーセイバーレイ・シュトロームでそれを受け止めようとするが、威力がすさまじく、押し飛ばされてしまった。

ネクサス
（ぐあああああっ！？）
グドン
「やっぱ…あれでいくしかないか…
出でよ！フェイトシザース！」

フェイトシザースが飛来し、分離、装着された。

フェイトグドン
「装着完了！フェイトグドン！！」
ザ・ワン
「ふん、ダークザギにも敵わぬくせに、この俺に敵うとでも？」
フェイトグドン
「あれはあくまで最初の話だ！」
ザ・ワン
「敗北したことに、変わりはなかろう！」
フェイトグドン
「その後逆転したんだよ！見てなかったのか！？
そして今度は最初から勝つ！」

フェイトグドンは、ハイパー・グドンサーベルを構え、ザ・ワンに斬りかかった。
ザ・ワンは、また受け止めようとする。

フェイトグドン
「そのパターンはもう飽きたんだよ！」
ザ・ワン
「…だろうな。
なら、今度は焼き尽くしてやろう！」

ザ・ワンは、フェイトグドンが目前に迫った瞬間、超絶火炎光弾を発射した。

フェイトグドン
「そう来ると思ったよ！」

フェイトグドンは、光速移動でそれをかわす。

ザ・ワン
「…攻撃が口からだけだと思うなよ。」
フェイトグドン
「なっ…！？」
ザ・ワン
「紫色怨念破壊光弾！」

ザ・ワンは、手から紫色怨念破壊光弾を出し、フェイトグドンを吹っ飛ばした。

フェイトグドン
「ギャアアアアアアアア！？」

その隙をつき、ネクサスがオーバーセイバーレイ・シュトロームを叩き込もうとする。

ザ・ワン
「…甘いな！
紫色怨念破壊光弾！」
ネクサス
（ぐあああああああああっ！？）

ネクサスも吹っ飛ばされてしまった。

ザ・ワン
「仕舞いにしてやろう！」

ザ・ワンは、超絶火炎光線を放ち、それはネクサスに直撃、変身が解けてしまった。

孤門
「副隊長！」

平木
「今度は私が…！」

吉良沢
「いいえ、西条副隊長を救出し、撤退してください。」

平木
「な、何でですか！？」

吉良沢
「今平木隊員が出ても、結果は同じです。
ビーストバルタンの目的はおそらく、ウルトラマンの打倒。
であれば、今引いても被害が出ることはないでしょう。
今は一度引き、体勢を立て直すのが最善です。」

平木
「…了解。」

クロムチェスターβは一時着陸し、和倉が降りて西条を救出すると、撤退した。
フェイトグドンも、ナイトレイダーが撤退したのを確認すると、装着を解除し、地中へ潜った。

ザ・ワン

「退いたか…まあいいだろう。
何度来ようと、同じことなのだからな。」

ザ・ワンも、姿を消した。

～フォートレスフリーダム外、ダム付近～

平木
「誰も…勝てなかった…」

孤門
「でも、いつまでも落ち込んでいるわけには…」

平木
「わかってる…わかってるけど…」

そう言いつつ歩いていると、目の前に一人の男が立っていた。

？
「あんたたち、ナイトレイダーの隊員か？」

孤門
「はい、そうですが…」

？
「…あんたたち二人とも、ウルトラマンになれる人間、だな？」

男のその言葉に、孤門と平木は警戒する。

平木
「何者！？」

？
「まて、俺はあんたたちの敵じゃない。
むしろ、味方だ。」

平木

「味方…？」

孤門

「あなたは…一体…？」

真木

「俺の名は、真木舜一。

あんたたちと同じ、ウルトラマンだった者だ。」

孤門・平木

「「えっ…！？」」

Ｅｐｉｓｏｄｅ１１　根源ー ザ・ワン ー（後書き）

次回予告

吉良沢
「まさか、あなたが現れるとは思っていませんでした。」
真木
「あいつを…ザ・ワンを倒せるのは、俺だけだ。」
平木
「これ以上は負けない！」
ザ・ワン
「無駄なことを！」
巨人
「真木…また会ったな。」

「Ｅｐｉｓｏｄｅ１２　勇者ー ザ・ネクスト ー」

真木
「もう一度…共に飛ぼう！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4642x/

ウルトラマンネクサス　ストーリー・ザ・ネクスト

2011年10月20日02時05分発行